

ISSN 2758-9579

2023
第2号

歴史資料室
年報
-2023-

公益財団法人

たましん地域文化財団

所蔵資料の紹介

凡例

- ・ 歴史資料室の寄贈資料・購入資料を紹介します。
- ・ 資料は種類別にして、分類番号・資料名・作成者・発行年・サイズ（単位はmm）などを記しました。
- ・ 資料の閲覧、資料画像の利用・転載などに関しては、歴史資料室までお問合せください。



■図書 01-20 (部分掲載)

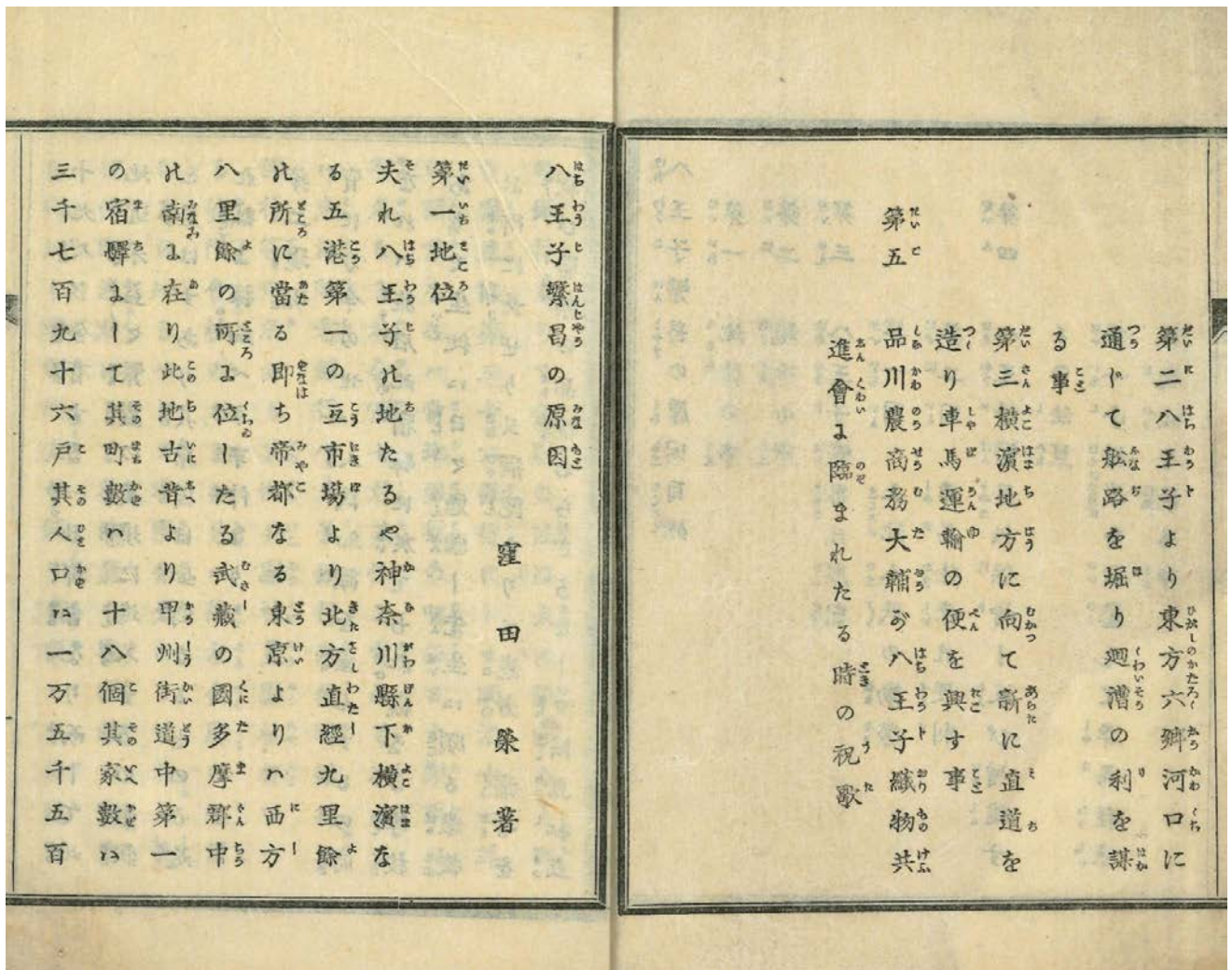
窪田榮『八王子繁昌之原因』

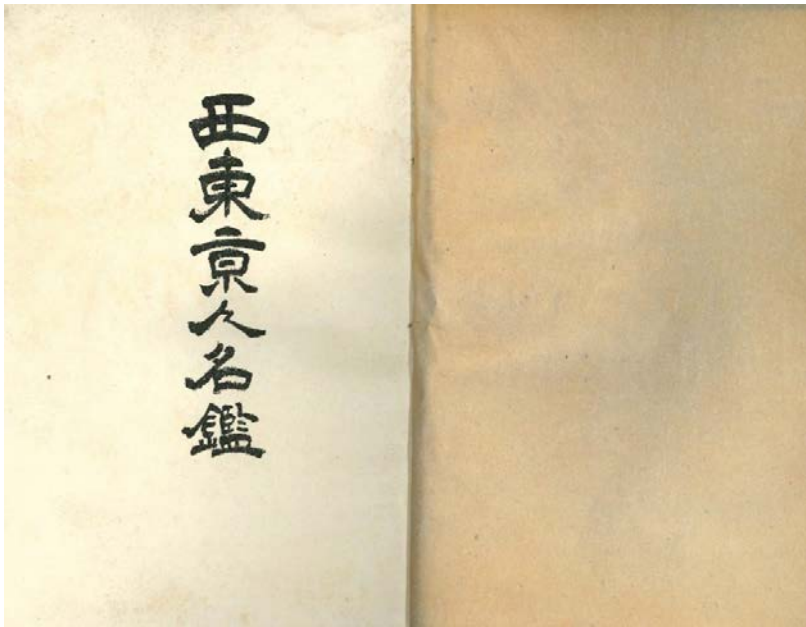
窪田榮

1882 (明治15) 年 24頁 サイズ：175×120

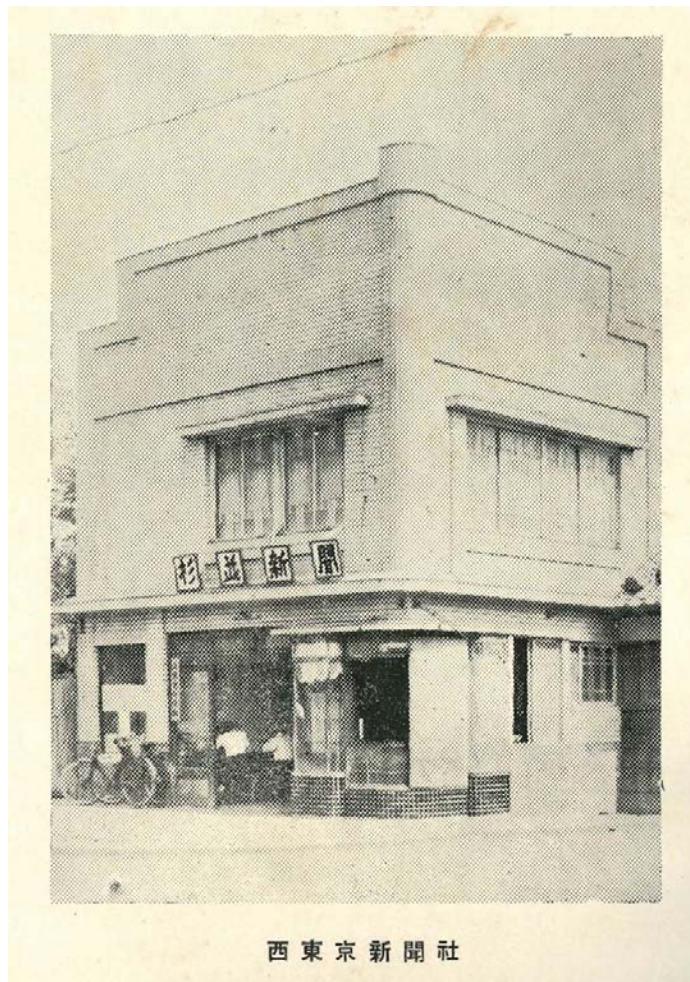
多摩東京移管 (1893) 以前に発行された八王子の地誌。内務省総務局図書課が発行した『図書課書目 納本之部 上』 (1886年) において同書の納本記録が確認できる。

130頁を超える『八王子繁昌誌』 (1899年) と比較すると情報量は少ないが、明治期の八王子の基礎資料として貴重な文献である。





■図書 41L-20 (部分掲載)
『西東京人名鑑』西東京新聞
社 1949 (昭和24) 年
111頁 サイズ: B5判



まえがき

本名鑑は東京西部地域に於ける名知の士を凡ゆる階層を網羅して編纂せんミ努力したるも、調査未了續出ミ刊行豫定日の切迫は多くの脱漏を免かれず、江湖の御期待に添い得なかつたことを遺憾とするミ同時に、各方面の御援助御協力に對し深甚の謝意を表する次第である。

掲載事項については努めて正確を期したるも調査期間中の變動、印刷中に於ける移動免かれずミ雖も一應調査の時期を以て編纂したるものにして、次版を俟つて改訂増補の豫定あるこゝを附言し、予め讀者並に掲載各位の御承諒を乞う次第である。

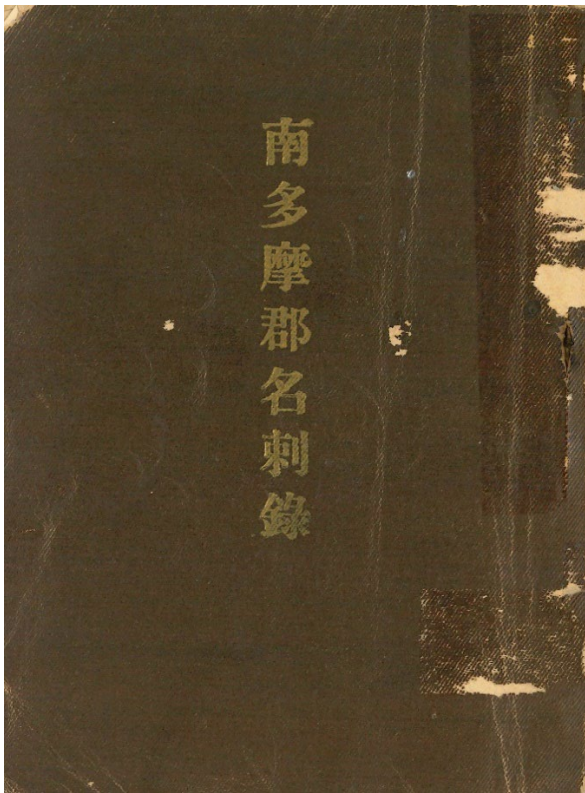
昭和二十四年六月

編者 識

本書を発行する西東京新聞社の所在地は杉並区阿佐ヶ谷、『週刊 杉並新聞』というローカル紙を手掛ける新聞社である。本書は「西東京」の名士たちを採録した紳士録である。ただし、社名や書名の「西東京」は多摩地域の市町村ではなく、杉並区のこと、採録された人物もほぼ同区の在住者や関係者である。

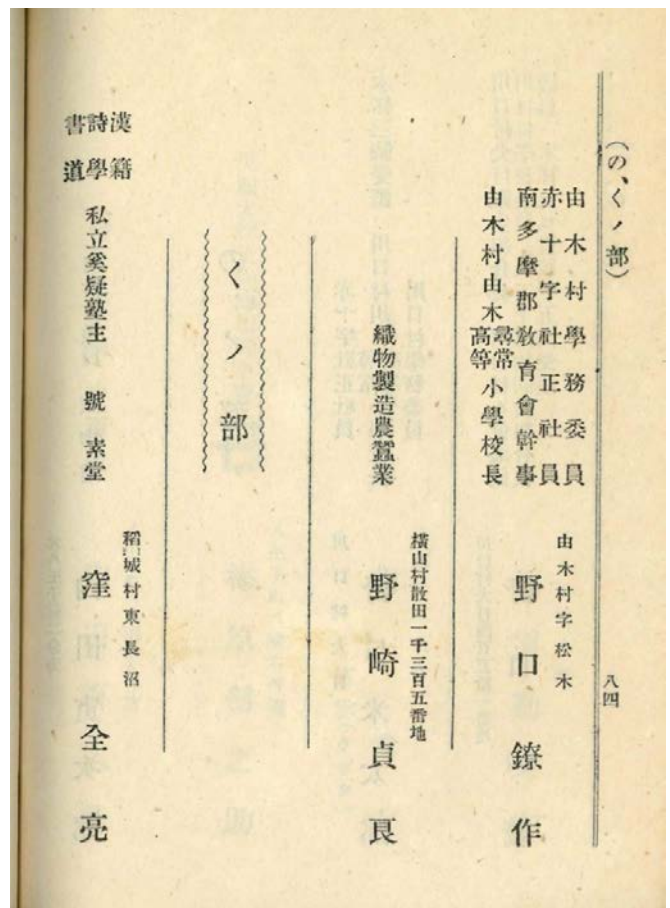
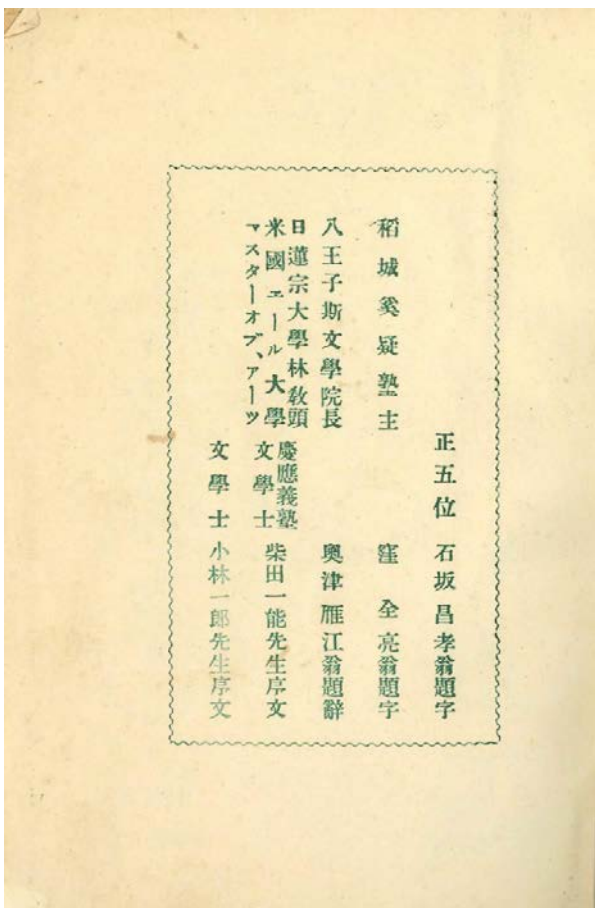
■ 図書 00-20 (部分掲載)

島村愛次郎『南多摩郡名刺録』 文華堂書房 1905 (明治38) 年
174頁 サイズ: 260×180



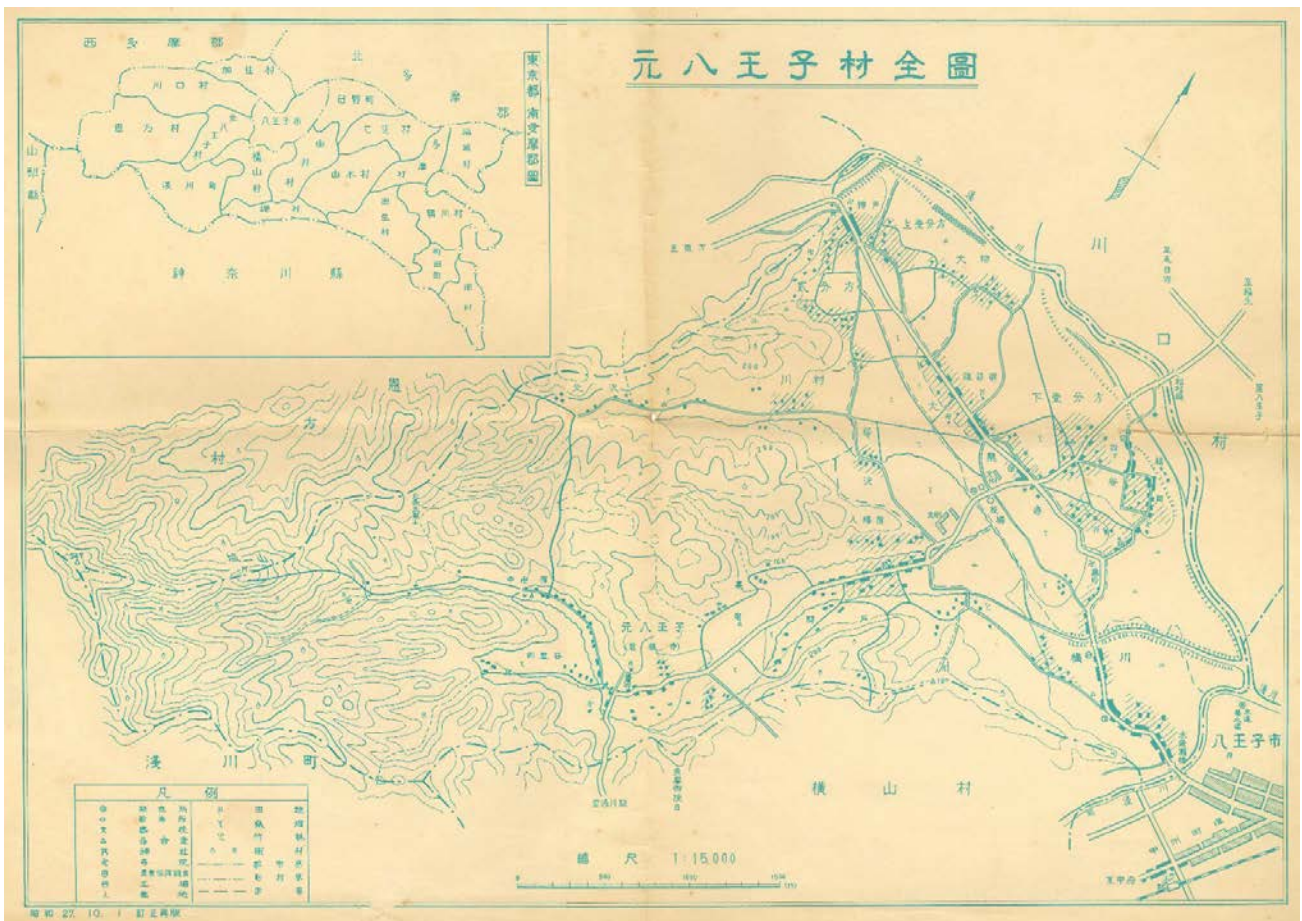
本書は後に『八王子案内 附・高尾山及近郊名所』(1911年発行)を編集した島村愛次郎が著作者であり、南多摩郡在住の名士たちの職業や役職、現住所などが記載されている。

題字・題辞・序文の揮毫・起草者は南多摩の自由民権運動で著名な石坂昌孝、稲城および八王子でそれぞれ教育者として活躍した窪全亮(奚疑塾)と奥津雁江(斯文学院)、奥津門下の柴田一能や小林一郎が記している。



■地図 MB001-058

元八王子村全図 1/15000 1952（昭和27）年10月1日訂正再版
 サイズ：375×530

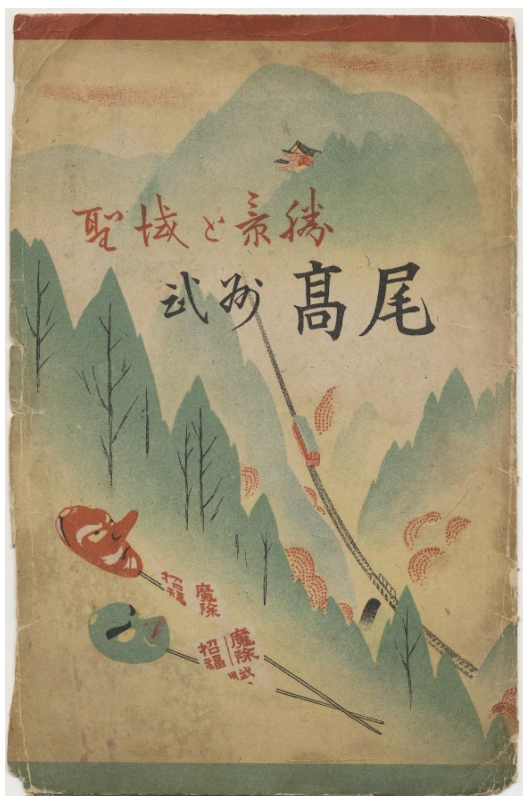


1953（昭和28）年に町村合併促進法が施行された。町村の財政基盤を強化するため、今後3か年間に全国約1万の町村を概ね3分の1にすることを旨とした「昭和の大合併」である。これに伴い八王子市は、1955（昭和30）年4月1日、元八王子・横山・川口・加住・由井・恩方の6か村を合併した。この地図は、このような経緯のもとで作製されたものであろう。

■絵葉書 001-603～612

聖域と景勝 武州高尾

高尾観光商業組合（版權所有）



001-603 聖域と景勝 武州高尾



001-604 ①武州高尾山案内



001-605 ②〔武州高尾山五合目付近の図〕



001-606 ③〔武州高尾山 小佛街道から八合目までの図〕



001-607 ④薬王院 奥ノ院より十二州見晴迄四丁



景光ノ櫻観テ於ニ堤櫻井金小ノ前變事今 町井金小

010-063 小金井町 今事
變前ノ小金井櫻堤ニ於テ觀
櫻ノ光景

010-064 小金井神社
ニ於テ出征將士ノ武運
長久ヲ祈願スル昭午會
長並幹部代表



小金井神社ニ於テ出征將士ノ
武運長久ヲ祈願スル昭午會長並幹部代表



(獲收ノ麥ルケ於ニ度年四十和昭) 張緊ノ後銃 町井金小

010-065 小金井町 銃後
ノ緊張(昭和十四年度ニ於
ケル麥ノ收穫)



(活動ノ群火防庭家谷山中ルケ於ニ習演空防次二第日十二月七) 緊張ノ後銃 町井金小

010-066 小金井町 銃後ノ緊張(七月二十日第二次防空演習ニ於ケル中山谷家庭防火群ノ活動)

010-067 小金井町 竣工近キ東京高等蠶絲學校全景



景全校學絲蠶等京東キ近工竣 町井金小



(練調火防ノ員團年青子女ルケ於ニ習演空防次二第日十二月七) 緊張ノ後銃 町井金小

010-068 小金井町 銃後ノ緊張(七月二十日第二次防空演習ニ於ケル女子青年團員ノ防火訓練)

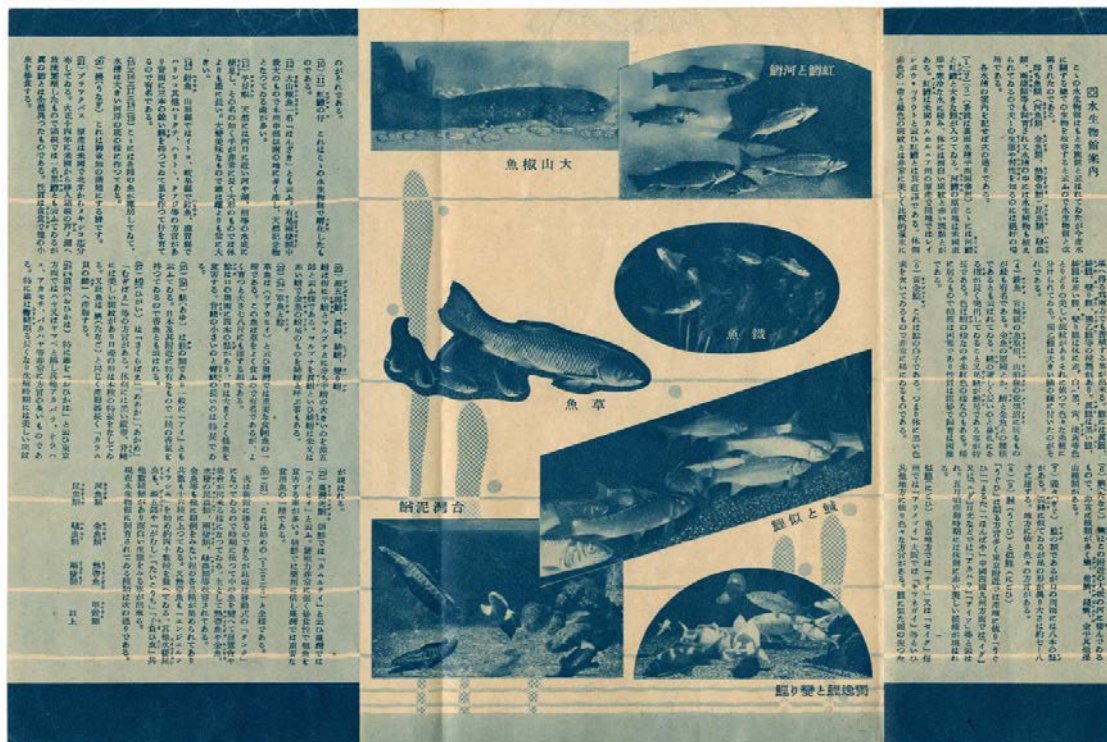
010-069 小金井町 銃後ノ緊張(七月二十日第二次防空演習ニ於ケル警防團並小學生防火班ノ活動)



(活動ノ班火防生學小並團防警ルケ於ニ習演空防次二第日十二月七) 緊張ノ後銃 町井金小

■チラシ 004-003

井之頭水生物館案内 井之頭恩賜公園 1942（昭和17）年
 サイズ：260×185



1934（昭和9）年に井の頭池の中之島に小動物園（現井の頭自然文化園）が開園する。その2年後、動物園内に開館した淡水生物専門の水族館「水生物館」のリーフレットである。

目次

所蔵資料の紹介

I 組織・沿革

1 組織図	14
2 年譜	15

II 事業報告

1 『多摩のあゆみ』の刊行	18
2 「多摩の歴史講座」の開催	22

III 活動報告

1 歴史資料室の構成	25
2 調査・収集	25
3 整理・保存	26
4 利用・公開	27
5 活動日誌	30

IV 調査研究

研究ノート 伊与田昌男の結核療養と写真活動	
―たましん地域文化財団所蔵「伊与田昌男コレクション」調査報告Ⅱ―	
山田 兼一郎	37
資料紹介 写真でみる保谷町の空襲	
―たましん地域文化財団所蔵「伊与田昌男コレクション」調査報告Ⅲ―	
山田 兼一郎	50

I 組織・沿革

公益財団法人たましん地域文化財団に設置されている歴史資料室は、多摩中央信用金庫創立40周年記念事業の一環として発足された「多摩文化資料開発プロジェクト」にはじまり、同金庫内の部署として活動した「多摩文化資料室」を経て誕生しました。

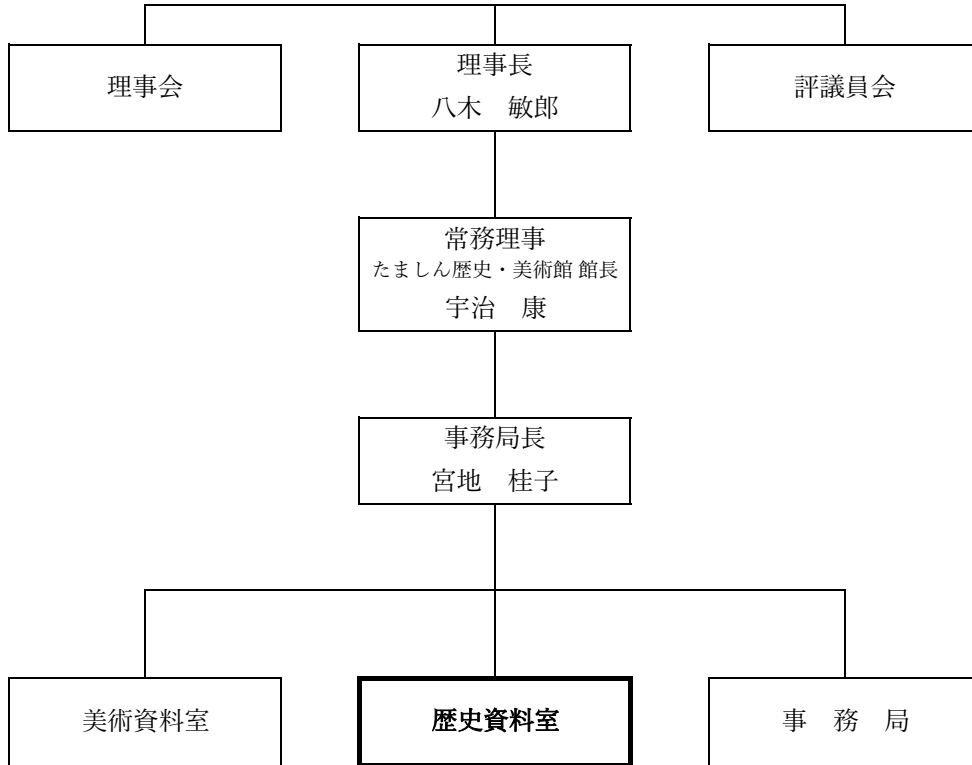
そして、当室は前身となる組織から3つの事業を継承しました。その1つ目は季刊郷土誌『多摩のあゆみ』の企画・編集の役割です。創刊から約半世紀にわたって刊行を続けてきました。

2つ目は「多摩の歴史講座」です。公益財団法人東京市町村自治調査会多摩交流センターとの共催事業として、25年余にわたって開催してきました。

そして3つ目は歴史資料室の運営です。前身の多摩文化資料室の時代から、多摩地域において文化活動を継続するなかで個人・在野の研究団体や各自治体・大学・研究機関からご寄贈いただいた歴史資料や刊行物（図書・雑誌）を整理保存し、どなたにでも利用いただけるよう公開してきました。

当室はこれらの活動を継続しながら、現在は多摩地域および周辺地域を対象とする専門図書室として、また多摩各地の地域資料アーカイブズ（主に近現代史資料）として、広く一般市民や在野の郷土史家、自治体関係者や研究者の方々にご活用いただいております。

公益財団法人たましん地域文化財団 組織図



公益財団法人たましん地域文化財団

2024年3月31日現在

理事

- 理事 八木 敏郎 (理事長)
- 理事 川口 哲生
- 理事 村野 安成
- 理事 和井田 慶子
- 理事 馬場 憲一
- 理事 中島 孝昌
- 理事 宇治 康 (常務理事)

評議員

- 評議員 齋藤 慎一
- 評議員 歌田 真介
- 評議員 岡野 法世
- 評議員 坂 浩秀
- 評議員 望月 一雄
- 評議員 遠藤 竜太
- 評議員 齋藤 裕之

監事

- 監事 小澤 伸光
- 監事 佐藤 収一

昭和48年 1973	4月 ▶ 多摩中央信用金庫創立40周年記念事業の一環として記念誌編集を担当する 総合企画室企画課・総務部総務課・人事部研修課で「創立40周年記念誌編集委員会」を発足
昭和49年 1974	9月1日 ▶ 多摩中央信用金庫創立40周年記念誌『多摩の歩みとともに』を発行
昭和50年 1975	6月2日 ▶ 多摩中央信用金庫創立40周年記念誌の継続事業として専務理事が責任者となり「多摩文化資料開発プロジェクト」が発足 11月15日 ▶ 『多摩のあゆみ』創刊号の発行（編集・多摩文化資料プロジェクト）
昭和51年 1976	1月 ▶ 多摩中央信用金庫の組織改革に伴い「多摩文化資料開発プロジェクト」が部署に昇格して「多摩文化資料室」を新設（多摩中央信用金庫本店内）
昭和58年 1983	11月15日 ▶ 別冊『多摩のあゆみ 総目次（創刊号-32号）』を発行
昭和60年 1985	11月15日 ▶ 創刊10周年となる『多摩のあゆみ』第41号を発行 別冊『多摩のあゆみ 総目次（創刊号-41号）』を発行
昭和62年 1987	3月16日 ▶ 多摩文化資料室を多摩中央信用金庫本店から国立支店5階に移転
昭和63年 1988	2月15日 ▶ 節目となる『多摩のあゆみ』第50号を発行 5月15日 ▶ 別冊『多摩のあゆみ 50号記念総目次（創刊号-51号）』を発行
平成3年 1991	4月26日 ▶ 財団法人たましん地域文化財団の設立認可 6月 ▶ 財団内に「歴史資料室」を開設（国立支店5階） 多摩文化資料室の業務（歴史部門）を継承
平成7年 1995	11月15日 ▶ 創刊20周年となる『多摩のあゆみ』第81号を発行 別冊『多摩のあゆみ 総目次（創刊号-80号）』を発行
平成9年 1997	6月 ▶ 東京市町村自治調査会多摩交流センターとの共催事業 「多摩の歴史講座」を開講
平成10年 1998	6月 ▶ 『多摩のあゆみ』の活動が、社団法人全国信用金庫協会「第一回信用金庫社会貢献賞 face to face賞」受賞 12月4日 ▶ たましん地域文化財団がメセナ大賞'98「メセナ地域賞」を受賞（社団法人企業メセナ協議会主催）
平成12年 2000	11月15日 ▶ 節目となる『多摩のあゆみ』第100号を発行
平成13年 2001	5月15日 ▶ たましん地域文化財団のホームページを開設 『多摩のあゆみ』総目次や新着図書・雑誌などの情報公開
平成16年 2004	7月 ▶ たましん地域文化財団ホームページに歴史資料室所蔵資料の検索システムを公開
平成17年 2005	11月15日 ▶ 創刊30周年となる『多摩のあゆみ』第120号を発行
平成18年 2006	9月20日 ▶ 「多摩の歴史講座」開講10年目を迎える （東京市町村自治調査会多摩交流センター共催事業）
平成24年 2012	4月 ▶ たましん地域文化財団が財団法人から公益財団法人へ移行

組織・沿革

平成27年 2015	11月15日 ▶ 創刊40周年となる『多摩のあゆみ』第160号を発行
平成28年 2016	9月23日 ▶ 「多摩の歴史講座」開講20年目を迎える (東京市町村自治調査会多摩交流センター共催事業)
平成29年 2017	9月 ▶ たましん地域文化財団ホームページにデジタルアーカイブを開設 『多摩のあゆみ』創刊号～第100号を公開
平成30年 2018	11月 ▶ デジタルアーカイブを追加更新 当室所蔵「絵図・地図」「チラシ」を公開
令和2年 2020	2月 ▶ デジタルアーカイブを追加更新 『多摩のあゆみ』第101号～第120号を公開 5月15日 ▶ 新型コロナウイルスの影響を受けて『多摩のあゆみ』第178号の発行延期 6月30日 ▶ 延期していた『多摩のあゆみ』第178号の発行 これに伴い、次号より従来の2月・5月・8月・11月の15日発行を末日発行に変更 デジタルアーカイブを追加更新 11月 ▶ 当室所蔵「絵図・地図」「チラシ」「絵葉書」および『多摩のあゆみ』連載中の「赤色 「赤色立体地図」を公開
令和4年 2022	3月1日 ▶ 新型コロナウイルス対応としてオンラインによる「多摩の歴史講座」を配信 (～8/31まで) (東京市町村自治調査会多摩交流センター共催事業) ※新型コロナウイルスの影響により2020年は中止 10月19日 ▶ 来場型対面形式の「多摩の歴史講座」を再開 (東京市町村自治調査会共催事業)
令和5年 2023	2月1日 ▶ たましん地域文化財団ホームページに『多摩のあゆみ』連載中の「多摩の金融史」 の各論考(PDFデータ)を公開 3月1日 ▶ 「多摩の歴史講座ONLINE2022」を配信(～8/31まで) (東京市町村自治調査会共催事業) 8月31日 ▶ 『歴史資料室年報』(オンラインジャーナル)の創刊 たましん地域文化財団ホームページにて公開

Ⅱ 事業報告

1 『多摩のあゆみ』の刊行

『多摩のあゆみ』は、当財団の設立母体である多摩中央信用金庫（現・多摩信用金庫）が店頭で無償配布する「茶の間の郷土誌」として、1975（昭和50）年11月に創刊されました。以来、年4回発行の季刊誌として、東京都の西部に位置する多摩地域の歴史・民俗・地理・自然などをテーマに、論考や情報などを掲載しています。

2 「多摩の歴史講座」の開催

「多摩の歴史講座」は、公益財団法人東京市町村自治調査会多摩交流センターと歴史資料室が1997（平成9）年度より企画・共催している連続講座です。本講座は多摩地域の歴史を知る手がかりとなるようなテーマを選択して、最新の研究成果を市民の方々にわかりやすくお伝えすることを目的として開催しています。

※（公財）東京市町村自治調査会多摩交流センターのホームページから2冊の記録集が閲覧、ダウンロードできます。

『地域の歴史を学ぶ－「多摩の歴史講座」10年の記録－』



『地域の歴史を学ぶ2－「多摩の歴史講座」第11回から第20回の記録－』



2023（令和5）年5月31日発行（発行部数：10,000部）

特集
多摩の
大学アーカイブズ



横山 了平
「騎馬」

特集 多摩の大学アーカイブズ

大学アーカイブズと地域資料	瀬戸口龍一
一橋大学は2025年に創立150周年を迎えます	一橋大学学園史資料室
帝京大学に残された写真からみる東京の郊外	堀越峰之・甲田篤郎 (帝京大学総合博物館)
麒麟児の行方	石井奈穂美 (日本獣医生命科学大学付属博物館)
一迷子の麒麟児は地域の宝になりうるかー	
武蔵野美術大学所蔵の民俗資料	小川宏和 (武蔵野美術大学民俗資料室)
一府中・東大和・青梅市収集資料を中心としてー	

洋風建築への誘い 第七十九回

玉川上水の流れ・橋・建物 その4	伊藤龍也
------------------	------

建物雑想記 No.74

桑都の養蚕民家 八王子長田養蚕	酒井哲
-----------------	-----

古文書は語る〈その六五〉

疫病除けの護符文書とその伝播	馬場憲一
一川島家文書「疫病神の詫び証文」よりー	

多摩の金融史 24

西多摩郡西多摩村の産業組合と地方銀行	小島庸平
--------------------	------

多摩の歴史を立体視！ー赤色立体地図の風景ー 17

中央線多摩川鉄橋と水害	小坂克信
-------------	------

本の紹介

藤井常文『中込友美と戦争孤児施設・久留米勤労輔導学園 一詩を愛し、江渡狄嶺を畏敬した男の挫折と彷徨の旅ー』	山崎丈
杉並区教育委員会編 『内田秀五郎と井荻町土地区画整理事業』	寺田史朗

企画・編集担当

山田兼一郎（歴史資料室 主任）

協力者・協力機関

中央大学大学史資料課、HOSEIミュージアム、三鷹市山本有三記念館、国分寺市教育委員会ふるさと文化財課、八王子市郷土資料館、あきる野市五日市郷土館、秋田県立博物館、昭島市教育委員会、東京都公文書館、杉並区教育委員会生涯学習推進課文化財係、（株）けやき出版、日本大学広報部広報課（大学史）、明治大学史資料センター、井の頭自然文化園、千葉達朗、藤井常文

配布先

一般定期（518件）	544冊	
贈呈（335件）	1,155冊	
執筆者（13件）	290冊	
協力者・機関等（19件）	157冊	合計 926件
たましん支店等（77件）	5,850冊	7,996冊

第191号

2023（令和5）年8月31日発行（発行部数：10,000部）

特集
資料を3Dで記録する



振本 恵美子
「CURRENT B-20」

特集 資料を3Dで記録する

文化財・歴史資料を3Dで記録する	野口淳
国分寺市の発掘調査・文化財と3D	中野純
下野谷遺跡を3Dで魅せる、学ぶ	亀田直美
浅川地下壕の三次元計測	鈴木慎也
—戦争遺跡の保存・公開への活用に向けて—	
特集「資料を3Dで記録する」	
（注・リンク・3Dモデルの動かし方）	

洋風建築への誘い 第八十回

玉川上水の流れ・橋・建物 その5	伊藤龍也
------------------	------

建物雑想記 No.75

国分寺崖線の近代和風建築 大森邸	酒井哲
------------------	-----

古文書は語る〈その六六〉

世襲代官支配下の年貢徴収の仕組み	馬場憲一
—下師岡吉野家文書「年貢受取状」「年貢小手形」より—	

多摩の金融史 25

明治・大正期の奥多摩の零細銀行	早川大介
—氷川銀行・小丹波銀行を事例に—	

多摩の歴史を立体視！—赤色立体地図の風景— 18

石碑のデジタル拓本	千葉達朗
—国分寺市妙法寺、川崎・伊奈両代官謝恩塔—	

本の紹介

青梅市郷土博物館編 『生誕二〇〇年 齋藤真指の生涯』	渡邊英明
昭島市教育委員会編 『小河内ダムの移転者たち—昭島がなぜ最多か—』	沖川伸夫

企画・編集担当

坂田宏之（歴史資料室 室長）

協力者・協力機関

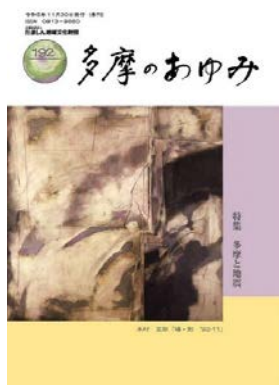
齊藤勉、国分寺市教育委員会ふるさと文化財課、西東京市教育委員会教育部社会教育課文化財係、小金井市文化財センター、瑞雲山妙法寺、青梅市郷土博物館、昭島市生涯学習部アキシマエンス管理課文化財係、多摩交流センター

配布先

一般定期（506件）	531冊	
贈呈（359件）	1,478冊	
執筆者（12件）	376冊	
協力者・機関等（13件）	293冊	合計 968件
たましん支店等（77件）	5,850冊	8,528冊

特集
多摩と地震

2023（令和5）年11月30日発行（発行部数：10,000部）



木村 克明
「場・影」92-11」

特集 多摩と地震

考古学からみた武蔵国の地震	宮原正樹
中世武蔵国における地震と年代	片桐昭彦
近世多摩の地震	矢田俊文
多摩地域と関東大震災	
武蔵野村と関東大震災	高野弘之
南多摩郡と稲城の被災と復興について	檜野泰巳
関東大震災と西多摩郡	田端和菜
いま、首都直下地震に備える	渡辺実

洋風建築への誘い 第八十一回

玉川上水の流れ・橋・建物 その6	伊藤龍也
------------------	------

建物雑想記 No.76

国分寺崖線の近代和風建築 大森邸②	酒井哲
-------------------	-----

古文書は語る〈その六七〉

江戸時代前期武蔵野新田の年貢上納の実態 一上連雀井口家文書「年貢納払勘定書」より一	馬場憲一
--	------

多摩の歴史を立体視！—赤色立体地図の風景— 19

中央線多摩川鉄橋と砂利線	小坂克信
--------------	------

本の紹介

田無神社編 『御遷座三五〇年大祭記念誌 写真と資料から見る田無神社』	近辻喜一
大野弘子著『銀杏並木の町から』	新井勝紘

企画・編集担当

山田兼一郎（歴史資料室 主任）

協力者・協力機関

埼玉県立さきたま史跡の博物館、新潟大学、武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館、稲城市郷土資料室、日の出町文化スポーツ課、瑞穂町郷土資料館、三鷹市スポーツと文化部生涯学習課、東京都公文書館、田無神社、（株）清水工房（揺籃社）、木村克朗、北爪寛之、下原裕司、井口征也、千葉達朗

配布先

一般定期（497件）	523冊	
贈呈（356件）	1,470冊	
執筆者（13件）	245冊	
協力者・機関等（14件）	102冊	合計 957件
たましん支店等（77件）	5,850冊	8,190冊

第193号

特集
多摩の作家と人間像

2024（令和6）年2月29日発行（発行部数：10,000部）

角田 葉子
「オドントグロッセム」

特集 多摩の作家と人間像

三鷹に集いし、太宰治の弟子たち —「弟子が残した太宰治」一読のスズメー	吉永麻美
山本有三 作家以外の活動について	三浦穂高
武者小路実篤の二面	石井めぐみ
土岐善麿 —その人間像 多摩地域の歌を中心 「吉野村だより」に吉川英治の人となりと地域貢献を想う —令和五年新春展示吉野村だよりから—	藤井真理子
生誕一〇〇年 現代に生きる遠藤周作のメッセージ	伊藤博司
現代作家が描く多摩の風景～事実と虚構の間～	神林由貴子
本特集で取り上げた文学館 利用案内	矢野勝巳

洋風建築への誘い 第八十二回

玉川上水の流れ・橋・建物 その7	伊藤龍也
------------------	------

建物雑想記 No.77

みんなの古民家・鶴川能ヶ谷	酒井哲
---------------	-----

古文書は語る〈その六八〉

大久保長安の宗教拠点への対応と施策 —高尾山薬王院文書「大久保長安書状」より—	馬場憲一
--	------

多摩の金融史 26

『三鷹商工名鑑一九七七』とそこから見える地域金融	佐藤政則
--------------------------	------

多摩の歴史を立体視！—赤色立体地図の風景— 20

武蔵野台地南端の中世城館	野口淳
--------------	-----

本の紹介

くにたち郷土文化館編『円形公園はじまり物語』	田崎宣義
青梅市立第七小学校創立百五十周年記念事業実行委員会編 『宿谷家日記 翻刻版・解説版』	三好ゆき江

企画・編集担当

坂田宏之（歴史資料室 室長）

協力者・協力機関

日向若山牧水顕彰会・若山牧水記念文学館、沼津牧水会・沼津市若山牧水記念館、東京都都市整備局都市基盤部交通企画課 事業調整担当、高尾山薬王院、千葉達朗、東京都デジタルサービス局デジタルサービス推進部、くにたち郷土文化館、青梅市立第七小学校、多摩交流センター

配布先

一般定期（494件）	521冊	
贈呈（356件）	1,470冊	
執筆者（15件）	530冊	
協力者・機関等（9件）	135冊	合計 951件
たましん支店等（77件）	5,850冊	8,506冊

第26回 多摩の歴史講座

多摩の古代文化

古代の多摩地域は現在の府中市を中心に古代武蔵国の行政・信仰・交通の中心地として栄えた地域です。近年、古代武蔵の代表的な遺跡が所在する府中市の周辺部からも多摩地域の奈良・平安時代を解明する手がかりが発見されています。

本講座では、多摩地域の新たな古代史像を探った各博物館の展示・調査成果についてご紹介します。また見学先である深大寺の歴史と境内の見所について、そして同寺に招来した東日本最古の国宝仏の来歴に隠された秘密を解説していただきます。

◇講師・発表テーマ

□第1講 10月10日（火）午後1時30分～午後3時30分

●「古代武蔵と清瀬」

講師：中野光将（清瀬市郷土博物館学芸員）

□第2講 10月24日（火）午後1時30分～午後3時30分

●「古代大型四面廂建物跡の発見」

講師：宮本涼子（日野市ふるさと文化財課学芸員）

□第3講 11月7日（火）午後1時30分～午後3時30分

●「古代多摩に生きたエミシの謎を追え」

堀越峰之（帝京大学総合博物館学芸員）

□第4講 11月21日（火）午後12時45分～午後3時15分（当日は二班体制で実施）

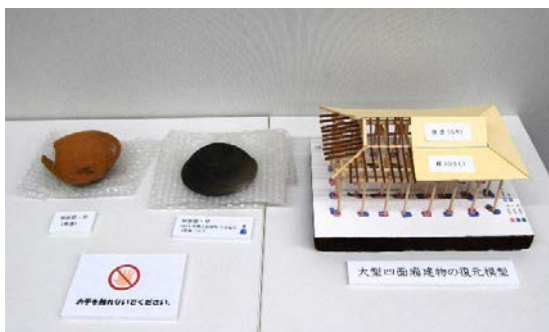
●現地見学会「深大寺の歴史と文化財」 会場：深大寺本堂

講師：竹村到（深大寺教務部学芸員）

□第5講 12月5日（火）午後1時30分～午後3時30分

●「深大寺の白鳳仏と渡来人高麗福信」

講師：荒井秀規（明治大学兼任講師）



- 会 場：多摩信用金庫府中支店4階会議室
(京王線府中駅南口2分)
- 定 員：75名
- 申込者数：92名(定員を超過したため抽選)
- 参加費：無料
- 企画担当：山田兼一郎(歴史資料室 主任)

- 第1講 参加者数：73名
- 第2講 参加者数：68名
- 第3講 参加者数：75名
- 第4講 参加者数：71名
- 第5講 参加者数：71名



当室では、新型コロナウイルス感染症の影響を受けて2021度の「多摩の歴史講座」は来場型対面形式の講座からオンライン形式に切り替えて開催しました。オンライン講座ではこれまでの対面講座にはない受講者層の参加があり、各方面からの好評を得ることができました。

そして、2022年度から平成9年から継続してきた対面講座に加えて、同講座を録画・編集した「多摩の歴史講座ONLINE」を初公開しました。このハイブリット型(対面・オンライン)の講座企画はこれからも継続していく予定です。

■視聴期間

2024年3月1日(金)～8月31日(土)

■申込方法

視聴を希望される方は、URL・二次元コードの申し込みフォームからお申し込みください。公開webのURL・パスワードをお送りします。



<https://bit.ly/3SkbFK9>

III 活動報告

1. 歴史資料室の構成

(1) 室員 (2023年度)

歴史資料室

室長	坂田 宏之
顧問	保坂 一房
主任	山田 兼一郎
室員	岩崎 冴子

(2) 施設の概要

所在地 〒186-8686

東京都国立市中1-9-52 5階

名称 公益財団法人たましん地域文化財団
歴史資料室

構造 鉄筋コンクリート造、地上6階

歴史資料室諸設備 (多摩信用金庫国立支店5階)

開架閲覧室 (延棚350.9㎡)

閉架書庫 (延棚156.4㎡)

事務室 (延棚85.5㎡)

応接室 (延棚67.9㎡)

廊下 (延棚111.9㎡)

(3) 室員の社会貢献ならびに教育研究活動

■保坂 一房

【社会貢献活動】

青梅市文化財保護審議会委員

立川市史編さん委員 (近代部会長)

日野市郷土資料館協議会委員

日野市古文書等歴史資料整理編集委員会委員

NPO法人共同保存図書館・多摩 (多摩デポ) 理事

【教育研究活動】

[監修・執筆] 『多摩市町村のあゆみ 多摩東京移
管130周年記念』 (東京市町村自治調査会、202
3年)

■坂田 宏之

【社会貢献活動】

説経節の会 (東京都無形文化財保持団体) 会長

八王子市伝統文化ふれあい事業実行委員

■山田 兼一郎

【教育研究活動】

[執筆] 「多摩地域ゆかりの写真家・伊与田昌男ー
たましん地域文化財団所蔵「伊与田昌男コレク
ション」調査報告Iー」 (『歴史資料室年報』
創刊号、2023年)

[執筆] 「伊与田昌男コレクションの紹介」 (『東
京都博物館協議会 会報』第130号、2024年)

2. 調査・収集

(1) 主たる調査 ※外部協力者の敬称略

・伊与田昌男関連資料調査 (於東京都文化財研究所資
料閲覧室)

日時: 2023年5月1日 (月)

調査者: 山田兼一郎

・伊与田昌男関連資料調査 (於国立国会図書館)

日時: 6月9日 (金)

調査者: 山田兼一郎

・国分寺市沖本家住宅洋館・和館および妙法寺川崎・
伊奈両代官謝恩塔現地調査

日時: 6月13日 (火)

調査者: 中野純、千葉達朗、坂田宏之

・檜原風穴現地調査

日時: 6月25日 (日)

調査者: 清水長正、坂田宏之

・伊与田昌男関連資料調査 (於国立国会図書館)

日時: 2024年1月16日 (火)

調査者: 山田兼一郎

・八王子市犬目町現地調査

日時: 1月17日 (水)

調査者: 齊藤勉、井上健、大里重人、千葉達朗
坂井繭美、坂田宏之

活動報告

・谷保城山現地調査

日 時：1月29日（月）

調査者：坂田宏之

・久保山緑地爆撃痕現地調査

日 時：2月19日（月）

調査者：齊藤勉、坂田宏之

(2) 主な寄贈・寄託資料

・荒木繁旧蔵図書（説経節関係）

・ニヶ領用水関係資料（図書〔複写含む〕・報告書・地図〔複写含む〕・行政文書〔複写含む〕など）

・立川高等学校関係資料（同窓会名簿、学生生活資料、学校新聞）

・八王子関係資料（地図）

3. 整理・保存

(1) 入手資料の整理（2023年度）

◆月別登録集計表

	図書	雑誌	絵葉書	地図	チラシ	ポスター	計
過年度総計	27,523	16,348	6,479	1,853	552	4,657	57,412
2023年 4月	50	23	0	0	0	11	84
5月	33	23	0	0	0	12	68
6月	71	38	33	0	0	6	148
7月	21	16	2	0	5	17	61
8月	23	30	0	0	0	4	57
9月	9	16	0	0	0	15	40
10月	13	26	0	0	0	19	58
11月	16	23	0	0	0	6	45
12月	21	18	0	0	0	13	52
2024年 1月	10	25	0	0	0	11	46
2月	18	30	0	0	0	2	50
3月	28	16	0	0	0	9	53
2023年度計	313	284	35	0	5	125	762
総 計	27,836	16,632	6,514	1,853	557	4,782	58,174

◆過去10年間の入手資料数の変動

年度	図書	雑誌	絵葉書	地図	チラシ	ポスター	合計
2014	519	343	2	9	5	214	1,092
2015	524	298	41	7	8	201	1,079
2016	490	335	195	8	5	211	1,244
2017	615	309	7	83	16	196	1,226
2018	550	305	31	77	8	100	1,071
2019	178	320	146	55	4	165	868
2020	338	253	124	1	11	115	842
2021	326	365	66	5	9	130	901
2022	246	299	8	5	6	126	690
2023	313	284	35	0	5	125	762

※ 図書は会報等の資料数も含む

※ 雑誌タイトル数…655件（タイトルや発行所の変更後も、巻号が続いているものは同一タイトルとした）

◆その他の入手資料

分類	内容	登録数
包装紙	多摩地域を中心に全国各地の商店の包装紙、主に寄贈資料に含まれていた包装紙や日常の購入品・贈答品の包み紙・紙袋など	252
ラベル	個人から寄贈された酒類・タバコ・マッチのラベルなど	1
新聞資料	個人から寄贈された新聞資料（切抜や部分を含む）	1
学校関係資料	個人から寄贈された学校関係資料（記念乗車券・時刻表など）	3
文書・地域史料	当室で購入した河川舟運・水上交通関係資料（あきる野市関係）	2

(2) 所蔵資料デジタル化について

当室では、デジタルアーカイブで所蔵資料を公開している。公開中の資料以外にも劣化状態の著しい資料や他機関に所蔵のない稀覯本や貴重資料、デジタルアーカイブ新規搭載に向けた「チラシ」「絵図・地図」「絵葉書」などのデジタル化を推進している。また、1990年から現在までの日々の新聞紙面（全国紙・ローカル紙）から多摩地域の歴史・文化に関する記事を収集・スキャニング（OCR処理済PDF）してデジタルデータとして保管している。

資料種別	点数
絵葉書	4セット／35枚
チラシ	3
地図	2
マッチラベル	1
地域史料 (聴取無線(ラジオ)関係資料)	2
新聞(記事切抜含む)	712

4. 利用・公開

(1) ホームページの更新

- ・『多摩のあゆみ』第190号を発行しました
(2023年5月31日)
- ・『多摩のあゆみ』第191号を発行しました
(8月31日)
- ・多摩の歴史講座、募集開始のご案内(8月31日)
- ・『歴史資料室年報』創刊号を発行しました
(9月15日)
- ・『多摩のあゆみ』第192号を発行しました
(11月30日)

- ・『多摩のあゆみ』第193号を発行しました(2024年
2月29日)
- ・多摩の歴史講座ONLINE、視聴申し込みのご案内
(3月1日)

(2) 収蔵資料の検索システム

当室は収蔵資料の利用・公開サービスを強化するため、2004年7月から資料検索システムの運用を開始している。2012年4月には(公財)たましん地域文化財団のホームページリニューアルに伴い、当室の資料検

活動報告

索システムが一新された。

当システムでは、収蔵資料を「図書」「雑誌」「地図」「絵葉書」「チラシ」という5つのグループに分類して、各資料群の特徴に合わせた検索項目を個別に設定した。とくに多摩地域のことを取り上げた論文の著者名・論題の検索機能が一つの特徴となっている。この機能は多摩地域を対象にした歴史系雑誌（市民研究団体の刊行物も含む）や多摩各地の地域博物館が刊行する年報・研究紀要に掲載された論考を対象としている。

(3) デジタルアーカイブの運用

当室では、上記の資料検索システムと併せて2017年9月からデジタルアーカイブの運用を開始した。このデジタルアーカイブでは、「絵図・地図」「チラシ」「絵葉書」などの所蔵資料56点、『多摩のあゆみ』バックナンバー（創刊号～第120号）や『多摩のあゆみ』連載で取り上げた「赤色立体地図」を公開している。

当システムには、キーワード検索の機能があり、公開中の『多摩のあゆみ』（創刊号～第120号）は本文テキストの全文検索が可能である。また、「絵図・地図」「チラシ」は画面上で自由に拡大縮小でき細部まで閲覧することができる。さらに、その一部は現在の地図（国土地理院）と重ねて透過することで、古地図と現在地の比較が容易にできる機能を搭載している。

また、「絵葉書」に関しては、明治から昭和前期にかけて作成されたもので、絵柄は多摩地域を中心に東京都23区や全国各地、国外にまで及び、マップやサムネイル一覧、データ、リストから検索・閲覧することができる。

(4) 収蔵資料の利用公開

◆申請者：株式会社けやき出版

内容：雑誌『BALL.』第6号（2023年5月15日発行）に掲載

資料名：絵葉書 多摩川吉野村の渡し

◆申請者：公益財団法人東京市町村自治調査会

内容：広報誌『ぐるり39～自治調査会だより～』2023年6月号に掲載

資料名：蒸気車往復繁栄之図

◆申請者：奥多摩町観光協会

内容：季刊誌『来さっせえ奥多摩』第70号（2023年7月15日発行）に掲載

資料名：絵葉書 日本百景奥多摩溪谷 日原、天祖山ト立岩山:奥多摩溪谷日原鐘乳洞

◆申請者：多摩信用金庫価値創造事業部

内容：『広報たまちいき』vol.122（2023年7月発行）に掲載

資料名：地図 東京府郡区全図

◆申請者：白百合女子大学図書館

内容：図書館1階エントランス書架展示「牧野富太郎著作・関連本」にて複製展示（2023年6月18日～8月31日）

資料名：チラシ 津村薬用植物園一覧

◆申請者：八王子市郷土資料館

内容：『八王子市郷土資料館だより』vol.111（2023年10月発行）に掲載

資料名：絵葉書（記念絵はがき 南多摩郡農会）南多摩郡の副業（1）目録

◆申請者：NHK福島放送局

内容：ニュース番組「はまなかあいづTODAY」にて放映（2023年8月25日放送）

資料名：絵葉書 飯坂温泉・仙台陸軍病院飯坂分院

◆申請者：小金井公園サービスセンター

内容：小金井公園150周年パネル展示にて複製展示（2023年9月10日）

資料名：チラシ 小金井町町勢一覧

絵葉書 小金井大緑地 外袋

絵葉書 訓練(東京府小金井大緑地)：紀元二千六百年東京府記念事業 小金井大緑地

絵葉書 勤労(東京府小金井大緑地)：紀元二千六百年東京府記念事業 小金井大緑地

絵葉書 錬成(東京府小金井大緑地)：紀元二千六百年東京府記念事業 小金井大緑地

絵葉書 競技(東京府小金井大緑地)：紀元二千六百年東京府記念事業 小金井大緑地

- ◆申請者：杏林大学社会人履修生
 内容：杏林祭（学園祭）「キャンパスには昔何があったのか？…昔を知り現代との「架け橋」を探ろう」にて複製展示（2023年10月28日～29日）
 資料名：地図 武蔵野町三鷹村番地入明細図
 - ◆申請者：公益財団法人東京市町村自治調査会
 内容：『多摩東京移管130周年記念 多摩市町村のあゆみ』（2023年12月25日発行）に掲載
 資料名：蒸気車往復繁栄之図
 - ◆申請者：BSフジ
 内容：情報番組「ビルぶら！レトロ探訪」にて放映（2024年2月9日放送）
 資料名：絵葉書 高尾山名勝 登り口
 - ◆申請者：中央公論新社
 内容：老川慶喜『堤康次郎〈中公新書〉』（2024年3月25日発行）に掲載
 資料名：チラシ 大泉学園都市・国分寺大学都市・東村山分譲地案内
 - ◆申請者：清瀬市市史編さん室
 内容：『市史研究 きよせ』第9号（2024年3月刊行）に掲載
 資料名：写真 伊与田昌男コレクション
 - ◆申請者：清瀬市郷土博物館
 内容：令和6年度企画展「清瀬駅100年の物語」にて展示（2024年6月9日～9月1日）
 資料名：写真 伊与田昌男コレクション（清瀬駅関係）
 チラシ 武蔵野鉄道沿線名所案内
 チラシ 武蔵野鉄道案内
 チラシ 春は武蔵野電車にのって
 図書 武蔵野線便覧
 図書 日帰へりの行楽
 図書 武蔵野線便覧
 図書 東京近郊電車案内 附乗合自動車
 その他、西武鉄道の発行物
 - ◆申請者：西武鉄道株式会社
 内容：清瀬駅開業100周年記念乗車券（2024年6月11日発売開始）および広報ポスターに掲載
 資料名：写真 伊与田昌男コレクション
- （5）刊行物の二次利用**
- ◆申請者：公益財団法人東京市町村自治調査会
 内容：広報誌『ぐるり39～自治調査会だより～』2023年6月号への転載
 利用刊行物：『多摩のあゆみ』第2号「特集」所収（青木栄一氏論考）
 - ◆申請者：川崎市みどり・多摩川協働推進課
 内容：多摩川おける自然体験イベント「水たまキッズ」にて参加者へ配布（2023年8月3日開催）
 利用刊行物：『多摩のあゆみ』第181号「特集」所収（榎本正邦氏・野村亮氏論考）
 - ◆申請者：株式会社 山川出版社
 内容：高等学校教師向け雑誌『山川歴史PRESS』16号（2023年10月15日発行）への転載
 利用刊行物：『多摩のあゆみ』第176号表紙画像
 - ◆申請者：青梅市自治会連合会第八支部
 内容：副読本『子どもたちに地域の歴史と文化を伝える会 中学校向け資料集』への転載
 利用刊行物：『多摩のあゆみ』第70号・第76号「特集」所収（中田互氏論考）
 - ◆申請者：公益財団法人東京市町村自治調査会
 内容：『多摩東京移管130周年記念 多摩市町村のあゆみ』（2023年12月25日発行）への転載
 利用刊行物：『多摩のあゆみ』第2号「特集」所収（青木栄一氏論考）、第100号「特集」所収（梅田定宏氏・天野宏司氏論考）

活動報告

(6) 教育普及活動

◆団体見学の受け入れ

団体名：成城大学（外池昇ゼミナール・22名）

日 時：2023年8月4日（金）

団体名：横浜市歴史博物館図書閲覧室（司書3名）

日 時：11月28日（火）

◆職場体験学習の受け入れ

多摩地域の中学校から職場体験学習についての依頼を受けて、体験学習の指導を実施した。当室の業務の一環である資料の「収集・整理」「利用・公開」の体験を通して、地域資料を収集・保管することの重要性を意識しながら各課題に取り組んでもらった。

学校名：国分寺市立国分寺第三中学校（3名）

日 時：2023年9月6日（水）～7日（木）

学校名：国立市立国立第一中学校（3名）

日 時：10月4日（水）～5日（木）

学校名：稲城市立稲城第五中学校（3名）

日 時：10月11日（水）～12日（木）

学校名：東京都立第五商業高等学校（3名）

日 時：11月8日（水）

5. 活動日誌（2023年度）

【4月】

- 6日 月例打合せ（事務局・歴史資料室）
- 6日 立川市柴崎福祉会館にて立川市シルバー大学で講義（保坂一房）
- 8日 武蔵野ふるさと歴史館にて公文書専門員・高野弘之氏と『多摩のあゆみ』第192号（特集）に係る打合せ（山田兼一郎）
- 11日 西東京市役所田無庁舎にて社会教育課文化財係・亀田直美氏と『多摩のあゆみ』第191号（特集）に係る打合せ（坂田宏之）
- 11日 国史跡・下野谷遺跡にて『多摩のあゆみ』第191号（特集）に係る現地見学（坂田宏之）
- 12日 NPO法人共同保存図書館・多摩（多摩デポ）理事会に出席（保坂一房）
- 12日 『地方史文献年鑑（2022年版）』の調査結果を送付（岩崎冴子）
- 13日 多摩信用金庫武蔵野支店にて東京大学准教授小島庸平氏等と金庫資料調査（保坂一房）
- 19日 東京都市町村自治調査会より資料画像提供依頼（保坂一房、山田兼一郎）
- 27日 当室にてNPO法人共同保存図書館・多摩（多摩デポ）・齊藤誠一氏と企画の打合せ（保坂一房）
- 28日 元三鷹市山本有三記念館館長・矢野勝巳氏が

来館、御著『文学する中央線沿線』をご寄贈（保坂一房）

【5月】

- 1日 東京文化財研究所にて伊与田昌男関連資料調査（山田兼一郎）
- 11日 月例打合せ（事務局・歴史資料室）
- 11日 立川市柴崎福祉会館にて立川市シルバー大学で講義（保坂一房）
- 13日 青木栄一先生を偲ぶ会に参加（於有楽町・東京交通協会・新国際ビル）（坂田宏之、保坂一房）
- 14日 市史編さん室にて立川市史近代部会会議に出席（保坂一房）
- 15日 NPO法人共同保存図書館・多摩（多摩デポ）カーリル研究会に出席（保坂一房）
- 17日 当室にてくにたち郷土文化館学芸員・竹内竜巳氏と企画展講演会に係る打合せ（保坂一房）
- 18日 稲城市郷土資料室にて学芸員・檜野泰巳氏と『多摩のあゆみ』第192号（特集）に係る打合せ（山田兼一郎）
- 18日 専修大学生田図書館にて伊与田昌男関連資料調査（山田兼一郎）
- 21日 NPO法人共同保存図書館・多摩（多摩デポ）

- 理事会および総会に参加（於調布市たづくり）
（保坂一房）
- 23日 当室にて東京都公文書館主任（史料編さん担当）・佐藤桂子氏等と多摩東京移管130周年記念講演会に係る打合せ（保坂一房）
- 23日 清瀬市郷土博物館にて学芸員・中野光将氏と第26回「多摩の歴史講座」に係る打合せ（山田兼一郎）
- 30日 多摩信用金庫各支店に『多摩のあゆみ』第190号の納品
- 31日 『多摩のあゆみ』第190号の配布（多摩信用金庫本店、立川市立中央図書館、立川市歴史民俗資料館ほか）
- 31日 多摩信用金庫経営戦略室より全国各地の信用金庫周年誌等に移管、図書登録
- 【6月】**
- 1日 『多摩のあゆみ』第190号の配布（帝京大学総合博物館、武蔵野美術大学民俗資料室、小平市中央図書館、日本獣医生命科学大学附属博物館ほか）
- 1日 日野市郷土資料館にて日野市古文書等歴史資料整理編集委員会に出席（保坂一房）
- 1日 奥多摩観光協会より資料画像提供依頼（山田兼一郎）
- 2日 清瀬市生涯学習センターにて東京都三多摩公立博物館協議会令和5年度定期総会に参加（山田兼一郎）
- 2日 多摩信用金庫本店にて多摩金融史研究会に出席（宇治康、保坂一房）
- 3日 「伝統芸能－車人形三座競演」（於八王子市いちようホール）にて八王子車人形・説経節の会の公演に出演（坂田宏之）
- 4日 「伝統芸能－車人形三座競演」（於・八王子市いちようホール）にて八王子車人形・説経節の会の公演に出演（坂田宏之）
- 5日 NPO法人共同保存図書館・多摩（多摩デポ）理事会に出席（保坂一房）
- 6日 多摩信用金庫価値創造事業部より資料画像提供依頼（山田兼一郎）
- 8日 月例打合せ（事務局・歴史資料室）
- 9日 『多摩のあゆみ』第190号の配布につき専修大学大学史資料室を訪問
- 9日 国立国会図書館にて伊与田昌男関連資料調査（山田兼一郎）
- 13日 沖本家住宅 洋館・和館にて『多摩のあゆみ』第191号（特集・連載）に係る現地調査（中村薫、野口淳、中野純、岡崎瑠美、高島もも、千葉達朗、坂田宏之）
- 13日 国分寺市妙法寺（川崎・伊奈両代官謝恩塔）にて『多摩のあゆみ』第191号（特集・連載）に係る現地調査（千葉達朗、坂井繭美、坂田宏之）
- 13日 白百合女子大学図書館より資料画像提供依頼（坂田宏之）
- 14日 深大寺にて学芸員・竹村到氏と第26回「多摩の歴史講座」に係る打合せおよび下見（坂田宏之、山田兼一郎）
- 15日 当室にてフォトグラファー・伊藤龍也氏と『多摩のあゆみ』（連載）に係る打合せ（坂田宏之）
- 18日 青梅郷土博物館にて青梅鉄道資料研究会に出席（保坂一房）
- 20日 NPO法人共同保存図書館・多摩（多摩デポ）カーリル研究会に出席（保坂一房）
- 20日 日野市ふるさと文化財課にて学芸員・宮本涼子氏と第26回「多摩の歴史講座」に係る打合せ（山田兼一郎）
- 21日 当室にて東京市町村自治調査会部長・松尾尚之氏等、株式会社けやき出版編集部小林拓也氏等と多摩東京移管130周年記念誌に係る打合せ（保坂一房）
- 22日 清瀬市郷土博物館学芸員・中野光将氏が資料調査のため来室（山田兼一郎）
- 23日 日本獣医生命科学大学附属博物館より刊行物の二次利用依頼（山田兼一郎）
- 23日 山本有三記念館にて『多摩のあゆみ』第193号（特集）に係る打合せ（坂田宏之）
- 25日 多摩地域史研究会第31回大会「氏照時代の多摩」に参加（於たましんRISURUホール）（保坂一房）
- 25日 檜原風穴の現地調査（清水長正、坂田宏之）
- 29日 日の出町文化スポーツ課にて谷合和久氏・田端和菜氏と『多摩のあゆみ』第192号（特集）に係る打合せ（山田兼一郎）

活動報告

【7月】

- 6日 月例打合せ（事務局・歴史資料室）
- 6日 郷土史家より「赤色立体地図」の提供依頼（坂田宏之）
- 12日 清瀬市郷土博物館学芸員・中野光将氏が資料調査のため来室（山田兼一郎）
- 19日 青梅市役所にて青梅市文化財保護審議会に出席（保坂一房）
- 20日 深大寺にて学芸員・竹村到氏と第26回「多摩の歴史講座」に係る打合せ（多摩交流センター職員2名、坂田宏之、保坂一房、山田兼一郎）
- 26日 当室にて東京市町村自治調査会・株式会社けやき出版と多摩東京移管130周年記念誌に係る打合せ（保坂一房）
- 26日 八王子市郷土資料館より資料画像提供依頼（坂田宏之）
- 28日 日野市郷土資料館にて日野市郷土資料館協議会に出席（保坂一房）
- 31日 たましんRISURUホールにて立川市史編集委員会に出席（保坂一房）

【8月】

- 2日 川崎市みどり・多摩川協働推進課より刊行物の二次利用依頼（坂田宏之、山田兼一郎）
- 3日 月例打合せ（事務局・歴史資料室）
- 4日 外池昇成城大学教授ゼミナール22名が歴史資料室の見学および講義（保坂一房）
- 8日 たましんRISURUホールにて立川市史編集委員会に出席（保坂一房）
- 8日 山川出版社より刊行物の二次利用依頼（山田兼一郎）
- 10日 東京都立中央図書館にて第41回多摩デポ講座「都立中央図書館の書庫・資料保全室の見学と、保存方針、保存計画の話を書く」に参加（山田兼一郎）
- 15日 NHK福島局「はまなかあいつTODAY」より資料画像提供依頼（山田兼一郎）
- 16日 多摩信用金庫恩方支店より刊行物の在庫運搬作業（坂田宏之、山田兼一郎）
- 17日 青梅市郷土博物館にて『多摩のあゆみ』第193号（特集）に係る打合せ（坂田宏之）
- 19日 説経節政太夫主催「日本の古典に触れて分かるう親しもう」に出演（於・東京吉原料亭金

村）（坂田宏之）

- 24日 当室にてフォトグラファー・伊藤龍也氏と『多摩のあゆみ』（連載）に係る打合せ（坂田宏之）
- 26日 古田悦造先生を偲ぶ会に参加（於東京学芸大学）（坂田宏之）
- 27日 学生の“KOTEN”芸能～説経節（語りと三味線）の世界～（主催：八王子市学園都市文化ふれあい財団）に参加（坂田宏之）
- 27日 馬事文化財団にて長塚孝氏・日高嘉継氏・村井文彦氏と『多摩のあゆみ』第194号（特集）に係る打合せ（山田兼一郎）
- 27日 神奈川県立歴史博物館にて特別展「関東大震災－原点は100年前－」を観覧（山田兼一郎）
- 27日 横浜開港資料館にて特別展「関東大震災100年 大災害を生き抜いて－横浜市民の被災体験－」を観覧（山田兼一郎）
- 27日 日本新聞博物館にて企画展「そのとき新聞は、記者は、情報は－関東大震災100年」を観覧（山田兼一郎）
- 27日 市史編さん室にて立川市史近代部会会議に出席（保坂一房）
- 29日 小金井公園より資料画像提供依頼（山田兼一郎）
- 30日 多摩信用金庫各支店に『多摩のあゆみ』第191号の納品
- 31日 『多摩のあゆみ』第191号の配布（多摩信用金庫本店、立川市立中央図書館、立川市歴史民俗資料館ほか）
- 31日 『歴史資料室年報』創刊号の刊行

【9月】

- 1日 『多摩のあゆみ』第191号の配布（瑞雲山妙法寺、西東京市郷土資料室、小金井市文化財センター、国分寺市ふるさと文化財課、府中市ふるさと文化財課ほか）
- 1日 多摩信用金庫本店にて金融史研究会に出席（宇治康、保坂一房）
- 6日 国分寺第三中学校3名の職場体験学習（坂田宏之、保坂一房、山田兼一郎、岩崎冴子）
- 7日 国分寺第三中学校3名の職場体験学習（坂田宏之、保坂一房、山田兼一郎、岩崎冴子）
- 8日 まちづくり計画研究所にて『多摩のあゆみ』第

- 192号（特集）に係るインタビュー（渡辺実、山田兼一郎）
- 13日 町田市民文学館ことばらんどにて『多摩のあゆみ』第193号（特集）に係る打合せ（坂田宏之）
- 15日 月例打合せ（事務局・歴史資料室）
- 21日 調布市武者小路実篤記念館にて『多摩のあゆみ』第193号（特集）に係る打合せ（坂田宏之）
- 22日 福生市郷土資料室にてフォトグラファー・伊藤龍也氏と『多摩のあゆみ』（連載）に係る調査（豊泉喜一、青海伸一、坂田宏之）
- 28日 当室にて東京市町村自治調査会・株式会社けやき出版と多摩東京移管130周年記念誌に係る打合せ（保坂一房）
- 28日 「八王子車人形と民俗芸能の公演」実行委員会に参加（坂田宏之）
- 29日 武蔵野大学にて『多摩のあゆみ』第193号（特集）に係る打合せ（坂田宏之）
- 30日 当室にてフォトグラファー・伊藤龍也氏と『多摩のあゆみ』（連載）に係る打合せ（坂田宏之）

【10月】

- 4日 青梅市自治会連合会第八支部より刊行物の二次利用依頼（坂田宏之、山田兼一郎）
- 4日 国立第一中学校3名の職場体験学習（坂田宏之、保坂一房、山田兼一郎、岩崎冴子）
- 5日 国立第一中学校3名の職場体験学習（坂田宏之、保坂一房、山田兼一郎、岩崎冴子）
- 6日 月例打合せ（事務局・歴史資料室）
- 10日 第26回「多摩の歴史講座」第1講を開講（宇治康、坂田宏之、保坂一房、山田兼一郎）
- 11日 稲城第五中学校3名の職場体験学習（坂田宏之、山田兼一郎、岩崎冴子）
- 12日 稲城第五中学校3名の職場体験学習（坂田宏之、山田兼一郎、岩崎冴子）
- 18日 東京都立図書館多摩図書館にて『多摩のあゆみ』企画に係る調査（坂田宏之）
- 20日 杏林大学学生より資料画像提供依頼（坂田宏之）
- 24日 第26回「多摩の歴史講座」第2講を開講（宇治康、坂田宏之、山田兼一郎）

- 27日 当室にて東京市町村自治調査会・株式会社けやき出版と多摩東京移管130周年記念誌に係る打合せ（保坂一房）
- 27日 東京都立図書館多摩図書館にて『多摩のあゆみ』企画に係る調査（山田兼一郎）
- 28日 東京都公文書館にて企画展関連講演会「多摩東京移管130年の軌跡—帰属・拡大・自立—」を講演（保坂一房）
- 29日 八王子市伝統文化ふれあい事業「伝統芸能体験・発表講座受講生による発表会」に参加（坂田宏之）
- 31日 当室にてくにたち郷土文化館・竹内竜巳氏と企画展講演会に係る打合せ（保坂一房）

【11月】

- 1日 青梅市役所にて青梅市文化財保護審議会に出席（保坂一房）
- 2日 月例打合せ（事務局・歴史資料室）
- 4日 日本遺産フェスティバル in 桑都・八王子および伝承のたまてばこ～多摩伝統文化フェスティバル2023～「八王子車人形・薩摩派説経節～魂宿る車人形～」に出演（坂田宏之）
- 5日 伝承のたまてばこ～多摩伝統文化フェスティバル2023～「八王子車人形・薩摩派説経節～魂宿る車人形～」に出演（坂田宏之）
- 7日 第26回「多摩の歴史講座」第3講を開講（宇治康、坂田宏之、山田兼一郎）
- 8日 東京都市町村自治調査会より資料画像提供依頼および刊行物の二次利用依頼（山田兼一郎）
- 8日 東京都立第五商業高等学校3名の職場体験学習（坂田宏之、山田兼一郎、岩崎冴子）
- 9日 豊泉喜一氏への聞き取り調査（伊藤龍也、坂田宏之）
- 17日 佐藤元雄家（日野宿・藤屋）にて佐藤家旧蔵資料に係る打合せ（宇治康、山田兼一郎）
- 21日 第26回「多摩の歴史講座」第4講（現地見学会）を調布・深大寺で開講（宇治康、川上康弘、坂田宏之、山田兼一郎）
- 28日 横浜市歴史博物館図書閲覧室司書・古川恵美氏等が歴史資料室を見学、説明（保坂一房）
- 29日 多摩信用金庫各支店に『多摩のあゆみ』第192号の納品
- 30日 『多摩のあゆみ』第192号の配布（多摩信用金

活動報告

庫本店、立川市立中央図書館、立川市歴史民俗資料館ほか)

【12月】

- 5日 第26回「多摩の歴史講座」第5講を開講（宇治康、川上康弘、保坂一房、坂田宏之、山田兼一郎）
- 6日 『多摩のあゆみ』第192号の配布（瑞穂町郷土資料館、五日市郷土館、日の出町役場、青梅市郷土博物館ほか）
- 7日 月例打合せ（事務局・歴史資料室）
- 7日 日野市役所にて日野市郷土資料館協議会に出席（保坂一房）
- 10日 市史編さん室にて立川市史近代部会会議に出席（保坂一房）
- 12日 国立市沖本家住宅90周年イベント（於国立三角駅舎／～19日まで）に『多摩のあゆみ』関連号の提供（坂田宏之、岩崎冴子）
- 13日 日野市ふるさと文化財課より「伊与田昌男コレクション」に係る問合せ（山田兼一郎）
- 14日 当室にて立川市歴史民俗博物館係長・浦島利浩氏等と第36回多摩郷土誌フェア関連講演会の打合せ（保坂一房）
- 14日 『広報たまちいき』の取材対応（宇治康、坂田宏之）
- 14日 三多摩地域資料研究会・東京都三多摩公立博物館協議会 令和5年度第1回合同職員研修会に参加（於東京都埋蔵文化財センター）（山田兼一郎）
- 15日 立川市役所にて立川市史編集委員会に出席（保坂一房）
- 16日 土生田純之先生を偲ぶ会に参加（於専修大学）（山田兼一郎）
- 19日 第135回 全国大学史資料協議会東日本部会研究会に参加（於昭和大学上條記念ミュージアム）（山田兼一郎）
- 21日 『多摩のあゆみ』第192号の配布（まちづくり計画研究所）
- 22日 当室にて西武鉄道株式会社・藤浦統氏と伊与田昌男コレクションに係る打合せ（山田兼一郎）
- 26日 当室にて東京市町村自治調査会・株式会社けやき出版と多摩東京移管130周年記念誌に係る

打合せ（保坂一房）

- 27日 『広報たまちいき』の当財団紹介ページに係る取材対応（宇治康、坂田宏之）
- 28日 2024年1月4日まで閉室（年末年始）

【1月】

- 5日 当室にて矢野勝巳氏と『多摩のあゆみ』第193号（特集）に係る打合せ（坂田宏之）
- 11日 月例打合せ（事務局・歴史資料室）
- 11日 当室にて東京市町村総合事務組合・松村仁文氏等と公平委員会講演に係る打合せ（保坂一房）
- 11日 清瀬市市史編さん室より資料画像提供依頼（山田兼一郎）
- 16日 国立国会図書館にて伊与田昌男関連資料調査（山田兼一郎）
- 17日 八王子市犬目町にて『多摩のあゆみ』（連載）に係る現地見学（斎藤勉、井上健、大里重人、千葉達朗、坂井繭美、坂田宏之）
- 18日 当室にてTRC-ADEACとデジタルアーカイブ等に係る打合せ（坂田宏之、保坂一房、山田兼一郎）
- 18日 中央公論新社より資料画像提供依頼（山田兼一郎）
- 19日 多摩信用金庫恩方支店より刊行物の在庫運搬作業（山田兼一郎）
- 20日 立川市アイムホールにて第36回多摩郷土誌フェア関連講演会「多摩東京移管130年のあゆみ」を講演（保坂一房）
- 23日 BSフジ「ビルぶら！レトロ探訪」より資料画像提供依頼（山田兼一郎）
- 29日 谷保城山にて『多摩のあゆみ』（連載）に係る現地調査（坂田宏之）

【2月】

- 2日 当室にて伊与田昌男コレクション（野比海軍病院勤務・竹中宏子氏証言）に係る聞き取り調査（宏子氏御令息・村野克明、山田兼一郎）
- 8日 月例打合せ（事務局・歴史資料室）
- 8日 八王子市伝統文化ふれあい事業実行委員会に参加（坂田宏之）
- 9日 成蹊中学・高等学校にて同校校長・仙田直人氏と当財団事業に係る打合せ（宇治康、坂田宏

- 之)
- 14日 当室にて越澤明先生・佐藤取一氏・渡辺彰子氏・立川印刷鈴木武氏と中島陟刊行物に係る打合せ(保坂一房)
- 17日 当室にてフォトグラファー・伊藤龍也氏と『多摩のあゆみ』(連載)に係る打合せ(坂田宏之)
- 19日 久保山緑地にて『多摩のあゆみ』(連載)に係る現地調査(斎藤勉、坂田宏之)
- 22日 日野市郷土資料館にて日野市郷土資料館協議会に出席(保坂一房)
- 22日 当室にて渡辺彰子氏と中島陟刊行物のゲラに係る打合せ(保坂一房)
- 28日 多摩信用金庫各支店に『多摩のあゆみ』第193号の納品
- 29日 『多摩のあゆみ』第193号の配布(多摩信用金庫本店、立川市立中央図書館、立川市歴史民俗資料館ほか)

- 30日 阿佐谷地域区民センターにて杉並郷土史会歴史講演会「成宗弁天池の変遷と近代杉並ー信仰の場から近郊別荘(今村力三郎邸)へー」を講演(山田兼一郎)

【3月】

- 1日 『多摩のあゆみ』第193号の配布(福生市郷土資料室、青梅市郷土博物館、三鷹市山本有三記念館、太宰治文学サロン、調布市武者小路実篤記念館ほか)
- 5日 Web会議にて湯浅八郎記念館と第27回「多摩の歴史講座」に係る打合せ(山田兼一郎)
- 5日 当室にて高橋珠州彦明星大学准教授と第27回「多摩の歴史講座」に係る打合せ(山田兼一郎)
- 6日 國學院大學たまプラーザキャンパスにて十代田朗國學院大學教授と第27回「多摩の歴史講座」に係る打合せ(山田兼一郎)
- 7日 日野市郷土資料館にて日野市古文書等歴史資料整理編集委員会に出席(保坂一房)
- 8日 月例打合せ(事務局・歴史資料室)
- 14日 立川市柴崎福社会館にて立川市シルバー大学で講義(保坂一房)
- 15日 多摩信用金庫本店にて金融史研究会に参加(保坂一房)
- 21日 たましんRISURUホールにて立川市史編さん委員会に出席(保坂一房)
- 26日 青梅市役所にて青梅市文化財保護審議会に出席(保坂一房)

IV 調査研究

研究ノート

伊与田昌男の結核療養と写真活動

ーたましん地域文化財団所蔵「伊与田昌男コレクション」調査報告Ⅱー

山田 兼一郎（歴史資料室）

はじめに

たましん地域文化財団歴史資料室（以下、当室）が所蔵する「伊与田昌男コレクション」は、約 28,000 点の写真作品群であり、撮影年代は 1935 年から 1980 年代前半の約半世紀にわたっている。これらの撮影地は、多摩地域のほかに東京区部や関東甲信越、北海道、東北、北陸、東海、近畿地方におよび、被写体は街中の子どもたちや東京の祭りなどが中心で、各地の風景・風物や人々の日常生活を生き生きと写し出した貴重な写真資料群と考えられる。

1914 年に八王子市内の商家で生まれた伊与田は、本格的な写真技術を美術学校で学び、卒業後は朝日新聞社の写真部員として報道写真の世界へと進む。同社在籍中に太平洋戦争が勃発、海軍報道班員に徴用されて従軍カメラマンとして東南アジアの戦地に赴いたが、従軍からまもなく肺を患い復員している。帰国後は亡国病と恐れられていた結核を発症し、戦後期は国立東京療養所（現・清瀬市）での療養生活を余儀なくされた。そして、高度経済成長期には、雑誌社の写真部員やフリー写真家として 1980 年代まで写真活動を継続している。

復員後に結核を患った伊与田は社会復帰を目指す療養生活のなかで、どのように写真活動を継続していったのか。将来的には「伊与田昌男コレクション」の全作品公開を目標としており、小稿の役割は八王子出身の無名の写真家・伊与田昌男の経歴や活動を調査して紹介することで、本コレクションがもつ地域の歴史資料としての利用価値を発信するための基礎作業と位置づけている。

なお、出典を明記していない写真はすべて伊与田コレクションに含まれている。

Ⅰ. 復員後の結核発症から再発まで

戦地での発病から復員 太平洋戦争で南方従軍していた伊与田が戦地で肺病を患ってスラバヤの海軍病院に入院していたことは、朝日新聞社社史編修センター所蔵の記録類や日本から戦地へ共に向かった久生十蘭（本名：阿部正雄）の従軍日記で確認できる⁽¹⁾。伊与田の正確な復員時期は不明ながら、1944 年 1 月発行の『社員写真帳（昭和 19 年）』に「編輯局員 写真部詰」の肩書で掲載されており、この頃には帰国していたと考えられる。

朝日新聞社へ復帰 まずは、当時の伊与田がどのような状況や立場にあったのか確認しておきたい。1944 年 7 月に朝日新聞社の「準社員」から「社員」に昇進し、東京本社へ「編輯総局員」として配属された。その後、1946 年 7 月には肩書が東京本社の「写真部員」に変更されている⁽²⁾。戦地から帰還した伊与田は朝日新聞社に復帰して、職務として写真活動を継続していたようである。

この時期の写真は、伊与田本人が「戦時」および「戦時写真」という一群で保管しており、空襲被害や戦後復興に向けた街の様子が記録されている。例えば、戦中の保谷町（現西東京市）や目黒区の空襲被害を撮影したもの、終戦後の池袋駅前にできたヤミ市の風景などである。

それぞれの写真を詳しくみてみたい。なお、保谷町の写真は別稿で取り上げたので除いている。写真①・②は、目黒区自由が丘付近の空襲とその翌日の惨状を撮影したものである。写真には「20.5.29」とのメモ書きが付されていることから、1945 年 5 月 29 日に目黒区を襲った最後の空襲被害を記録したものである。空襲時は、上目黒 5 丁目の工場に日本軍の小

調査研究

型機が墜落して工場 1 棟が全焼したという⁽³⁾。



写真① 戦時・自由が丘空襲



写真② 戦時・自由が丘空襲

写真③をみると、伊与田は翌 30 日も目黒区内での撮影を続けていたようである。これは『暮しの手帖（特集 戦争中の暮しの記録）』（96）に掲載されたもので、「空襲が一夜明けた、まだくすぶっている焼跡の消火作業（目黒区自由が丘附近 20 年 5 月 30 日）」というキャプションが付されている。



写真③ 戦時・自由が丘空襲

つぎに、終戦後の写真④をみてみよう。看板やその柱の「明るい（J・V・C）連鎖市場」

「森田組」という表記から、1946 年 3 月池袋駅東口（豊島区）に開設した「森田組東口マーケット」の様子で、同地区で最初にできた木造長屋形式マーケット（ヤミ市）である。写真脇の「21.2.16」という書き込みに注目すると、開設前からのにぎわいがみてとれる⁽⁴⁾。



写真④ 池袋駅 森田組東口マーケット

ただし、これらの写真が朝日新聞社の取材なのか、伊与田の個人的な写真活動なのか判断する材料は得られなかった。この点については今後の課題としたい。

療養所への入所と胸郭成形手術 1946 年 12 月、伊与田の結核発症が判明、この時期から写真活動が確認できなくなり、1947 年 6 月には朝日新聞社を病気休職している⁽⁵⁾。その後、伊与田は国立東京療養所で療養生活を送ることになるのだが、入所当時を主治医の植村敏彦（東京療養所医務課長）が以下のように回顧している。

伊与田君がはじめに入所したのは昭和二十三年五月、この時には右に大きな空洞があり右の上肺も浸されていました。そこで、さっそくその年に

合計八本の骨をとる成形をやりました。この結果右の空洞はつぶれ完全に閉じたのです。

(『保健同人』12-7、1957年7月発行)

戦後新たに国立病院として創設された国立結核療養所は、戦中の旧陸海軍病院や傷痍軍人医療施設を移管したもので、GHQの指示によって、一般市民も対象となる施設へと変更された。しかし、創設当初の入所規定などによれば、一般市民の入所はあくまでも「余裕ある場合に限る」と限定的なもので、入所者の大半は元軍関係者であったという⁽⁶⁾。

その後、1947年に入所規定の改定があり、元軍関係者を優先的に取扱う事項が削除されている。報道班員(判任官待遇)として南方従軍した伊与田が准軍属としての取扱いを受けたのか定かではないが、1948年5月に国立東京療養所へ入所している。ちなみに、同じ月に著名な俳人・石田波郷も入所しており、2人は療養生活を通して親交を深めていく。

1948年中に胸郭成形の手術をうけて8本の肋骨を切除しており、これ以後は治療に専念するためか、同年11月に朝日新聞社を満期退社している⁽⁷⁾。手術直後の詳しい経過は不明ながら、1949年末には伊与田が療養所の日常風景を撮影した写真が療養雑誌に掲載されており、この時期には所内で写真活動を再開するまでに体調が回復していたと推測できる。

写真活動の活発化 体調回復と比例するように、1953年中の写真活動は活発になっていき、「ニコールによる写真懸賞」への入選、第13回国際写真サロンに〈獅子舞〉を発表している。さらに、『アサヒカメラ』38-2で企画された写真評論家・伊奈信男と画家・裕伊之助の「対談批評」では、各誌の新年号口絵が取り上げており、伊与田の〈いろり〉も高評価を得ている。

なお、下記の記事を見ると、カメラクラブの会員も指導にあたる伊与田の写真活動に注目していたことがわかる。

顧問伊与田昌雄先生が、このたびパリで開催された国際写真サロンに見事入選いたしました。

このような優れた先生にご指導していただけることは誠に光栄に思います。ますますご健斗を祈って止みません。後日入選作品をサロン欄にて拝見させて頂く予定です。ご期待下さい。

(『保健同人』8-7、1953年7月発行)

社会復帰から再発まで 1953年の夏から伊与田は回復者が行う作業療法を開始するまで快方に向かっており、1954年10月には8年にわたる療養生活を経て、目出度く退所することができたと植村医師が回顧している。

やっと、培養検査でも(結核菌が)出なくなったのは、二十七年の七月からです。

二十八年の九月から作業療法に出て、やっと二十九年の十月に退所することができました。

(『保健同人』12-7、括弧内は筆者が補足)



伊与田の主治医・植村敏彦

退所後の伊与田は、前職のカメラ一筋で生きていくことを決心していたかのように、商業写真や報道写真、アマチュアへの指導など、復帰まもない身体を酷使して働いたようである。伊与田本人は以下のように当時を回想する。

八本の成形をしたからだ故人なみの労働に耐えられるとは、けっして思っただけではなく、あえて最低給でがまんして雑誌社の囑託になったのである。

(中略)

いくばくの余裕ある生活をとれば、仕事(写真製作)のあるままに二つ三つと手がけていく。

(『保健同人』12-7)



復帰後に撮影出張で訪れた京都・祇園

嘱託として働いたのは、雑誌『食生活』編集部での仕事と考えられる⁽⁸⁾。この雑誌の歴史は古く、明治末期に内務省の意向を受けて国民の栄養状態向上を目指した「大日本食養会」の設立にまで遡り、“食育の祖”と呼ばれる同会の主宰・石塚左玄（陸軍薬剤官）が発行した雑誌『食養』がそのはじまりである。いくつかの組織改編や雑誌名の改題を重ねて、戦後に財団法人国民栄養協会となり、雑誌『食生活』の発行などを引き継ぐことになるが、伊与田はこの雑誌の編集部でカメラマンの職を得たようである。

その他に当時は家政教育社の『家庭科教育』という雑誌の口絵も手がけていた。

ながい間すべてを犠牲にして、私のために尽してくれた母をすこしでも気楽にさせたいと思えば今までのようなフリーの撮影だけでは実に不安定なわけである。幸い友人からカメラ店共同経営の話があり、一、二の先輩に共同経営のおずかしさを注意されたが、母子二人の生活費を得るためにはいちまつの不安はあっても、やはり渡りに舟であった。

（中略）

開店の運びについたのが去年の九月であった。相棒が写真にズブのしろうとのため、店舗の設計、装飾から、商品の仕入、対外宣伝にいたるまで、

私一人の手でまとめあげ、さて開店となれば毎日のD・Pから雑誌等の写真撮影まで引受けて八面六臂の大活躍である。

（『保健同人』12-7）

1956年9月、伊与田は友人からの誘いを受けて、写真店（D.P屋）を開業した。雑誌編集の嘱託や写真製作の依頼仕事だけでは、望んでいた安定した収入と生活が得られなかったようで「収入のすべては部屋代と食費に消えて」いった述べており、写真店の開業は経済的な理由が大きかったのであろう⁽⁹⁾。開店前の伊与田は「撮影の仕事の合間に、真夏の炎天の東京の街を、新しく持つ店探しに歩き廻ってくたくたになって帰る」という生活だったようで⁽¹⁰⁾、疲れ切った息子を心配しながらも、ただ黙って見守る母を回顧しながら、当時の様子を語っている。

何とか開店にこぎつけた「朝日写真商会」という写真店が伊与田と友人の店舗であり、「渋谷区公会堂通」という現在の代官山駅や恵比寿駅からほど近い場所に立地していた⁽¹¹⁾。「朝は九時に店をあげ一日中立ちずめに働いて夕食を食うのが十一時、就寝は十二時も珍しくない」という状況で開店後も厳しい就労環境であった⁽¹²⁾。



友人と共同経営する朝日写真商会
（『保健同人』12-7より転載）

再発、そして再び療養所へ 復帰後の伊与田は「結核回復者だからといって、仕事に甘える気など誰も持っているとは思えない」と語っているように⁽¹³⁾、かなりの無理を自らに

強いて仕事へ打ち込んでいた。そして、開店からわずか3ヶ月後の1956年12月26日に伊与田は再発を知らされることになる。



再発後、病床で療友と語る伊与田
（『保健同人』12-7より転載）

伊与田の再発について、主治医の植村医師は「睡眠が不足するということがまず何よりよくないのです。（中略）ですからだいたいにおいて夜する仕事、睡眠不足がつづくような仕事たとえば、写真屋さん、洋服の仕立屋さん」などの再発リスクが大きく「東療を出た人でもこの写真屋をやっている人が、七人いますが、しかしそういう人たちの八割くらいが再発」すると述べている⁽¹⁴⁾。

多忙な毎日を送る伊与田本人は「こころのすみには再発の恐怖を感じながら」も激務をこなすしかなかったようで、再発を防ぐためには「回復者は自己の病状をよく知って労働の限界がどのへんにあるのか確める」ことが必要なのだと自戒の念を語っている⁽¹⁵⁾。



再発した伊与田の世話をする母
（『保健同人』12-7より転載）

II. 療養中の写真活動－保健同人－

療養雑誌『保健同人』 結核と治療の大衆啓蒙雑誌『保健同人』は、創業者・大渡順二を中心として1946年1月に旗揚げした出版社「保健同人社」によって創刊された。大渡は1929年から1941年まで朝日新聞社で政治記者として活躍していたが、社内改革運動の挫折をきっかけに退社している。その後、1943年に結核発症、戦局の悪化を危惧して、妻の実家がある京都へ家族一同で疎開しているが、この疎開中に京都大学結核研究所で胸郭成形術を受け、終戦まで疎開先での療養生活を継続した。1945年8月末に一家で帰京すると、1946年に神田区三崎町（現千代田区）に「保健同人社」を設立した。



朝日新聞政治記者時代の大渡順二
（『病めるも屈せず 大渡順二文集I』より転載）

伊与田の写真が『保健同人』に初掲載されたのは1949年11月号であり、同誌への写真掲載や寄稿は1964年5月まで年間で複数回にわたり継続されていった。

特筆すべきは、「自由時間百態」「枕頭拝見」「入院から退院まで」「見舞客さまさま」などの特集グラビアで、入所者や家族、療養所の関係者しか知り得ないありのままの療養生活が記録されており、当時の国立東京療養所の内実を知ることができる非常に貴重な写真である。ただし、グラビアで使用された写真原版の多くが本コレクションには含まれていない。

そして、1950年10月には、全国の「療友が手をつなぐ運動」として賛同者を募って「保

調査研究

健同人世話委員」が発足し、同誌の愛読者から委嘱された全国 66 名の 1 人として伊与田も委員を命じられた。また、創刊 6 年目に読者である全国の療友へ感謝の意を表するとともに、記念として「保健同人こけし章」の贈呈を開始し、伊与田に対しては「写真のことでは大へんお世話になりました」というメッセージが送られている⁽¹⁶⁾。



石田波郷を囲み病床で句会(グラビア「自由時間百態」)
(『保健同人』4-11より転載)



朝6時30分、患者たちの起床(グラビア「療養所の日」)
(『保健同人』7-10より転載)

保健同人カメラクラブ 1950年12月には読者療友会として、クリスマスカードの会・花の会・亀の子会・柳友会・切手同好会・ラジオの会・カメラの会などが次々と結成された⁽¹⁷⁾。全国各地の療養所や病院で療養生活を送る患者たちの憩いともなっていた『保健同人』は、誌面を通して読者たちの文化活動を後援して

いたのである。写真趣味や写真に興味のある愛読者の集いが「カメラの会(保健同人カメラクラブ)」である。

このなかで、伊与田はクラブの「顧問」と呼ばれる指導的な立場を確立していく。1952年11月に保健同人カメラクラブの第1回誌上コンクールの開催が告知され、その審査を編集部と顧問・伊与田が務めることを発表し、その後のコンクールの審査員も伊与田が担っていた。

伊与田先生の講評は、先生非常にご多忙のため、全部の作品についてはできかねますので、今後は主なものだけをお願いすることにしました。(中略)先生の御体の事も考え、皆様の御諒解を得たいと存じます。

(『保健同人』8-8、1953年8月発行)

クラブの最大事業の一つである回覧アルバムも昨年末までに第十号を出し、それに伊与田昌男氏がクラブの顧問をお引受け下さって、毎号のアルバム作品には懇切丁寧にご批評ご指導文をたまわり会員皆様のご参考に供され、号を重ねるごとに、レベルも向上しアルバムも充実してまいりました。

(『保健同人』9-1、1954年1月発行)

七月十八日関東地区第二回ミーティングを東京後樂園で行いました。

(写真)伊与田先生をはじめ計十名の方が出席され、先生に撮影の指導をしていただき楽しいひとときを過ごしました

(『保健同人』9-9、1954年9月発行)



ミーティング後の記念写真(於・後樂園)
(『保健同人』9-9より転載)

1953年1月にカメラクラブの会員数は65名に達して、さらに1年後には100名を超えている。伊与田は、回覧アルバムという会員諸氏の作品が掲載される冊子の写真の批評と指導、誌上コンクールの選評を担当するなど、カメラクラブの指導にあたっている。

退所後も指導を継続 退所後の伊与田はカメラクラブでの指導を続けていた。社会復帰後の伊与田は嘱託カメラマンとして雑誌編集に携わる傍ら、いくつもの仕事を掛け持ちしていたので、カメラクラブへの指導もその一つであったと思われる。

新しい記念写真

伊与田昌男

早いもので回覧アルバムの作品批評をさせていただいてから、四年あまりになります。この間数多くの会員の作品に接したわけで、中にはカメラ雑誌にも作品の載るほどになった会員もあり、私としても張り合いのある仕事を仰せつかったわけです。

しかし多くの会員は、別に写真作家になろうとの野望もなく、ただ闘病のなぐさめとして、写真を撮っているのではないかと思います。と申しますのは、アルバムに送られて来る写真を見ると、記念写真が割合多く、これは体力的制限のあることと、案外、気楽な気持ちで撮れるということが、身近かの被写体を選ばせるわけでしょう。

ここで私のいいたいのは、たとえ記念写真であっても、ただ“前を向かせてパチリ”の写真では、なんのへんてつもない写真におわるわけですが、何か一と工夫あつたなら、あとでアルバムを繰って見たとき、キツトふきだすようなもの、あるいはそのときの雰囲気を感じるものができると思います。ここに参考としてA・B二枚の写真をならべてみることにしましょう。

Aはカメラに向っている月並のものですが、Bを見るとこれは同じ場所で同じ人物を撮つていてもその人物の動作をよくとらえ、感情の表現が強くてているのです。Aは静的で、変化にとぼしく、Bは動的であり、二人の人物に感情のつながりが出ており、画に深味を与えているのがよくわかりと思います。

要するに、知人の写真を撮るにしても、その動作をとらえて、また適当に、周囲の状景描写も忘れず写されたなら、たとえ人物が後向きのもので、単なる写真に終らず、作品価値のあるものができるとは思います。

正面を向いた記念写真は、昔からの写真屋さんにかかせて、私たちは知人の顔もスナップ的に写したいものです。

もちろん、何十人という団体写真などは型通り写して後、できれば人びとが整列する前後の雰囲気についてスナップしたならば、また面白いものができると思います。

(『保健同人』10-12、1955年12月発行)

第四回保同カメラクラブ写真コンテスト選評

伊与田昌男

第一回からその応募作品を拝見してきて思うことは、病気という特殊事情によつて結ばれているグループ活動だけに、その人その人の健康状態が作画に大きく左右することはいなめない。また健康をとりもどし社会に復帰すると、自然クラブを遠ざかってしまうわけである。このように新陳代謝のはげしい会の中でふるい人ほどながく作画しているので選考してみると、おのづからその人たちの作品が多く入選することはとうぜんといえよう。

今回のコンテストでも、上位をとつた清水、飯塚、藤岡の諸氏の活躍は年とともにめざましい。作品の傾向も現写壇の動きを敏感に反映し、上位の作品には生活をテーマにしたリアリズムのものがみられる。物の本質を凝視し把握することは不屈の精神あつてこそまた闘病もできるわけである。

(『保健同人』11-9、1956年8月発行)

退所後は上記のような『保健同人』への寄稿もあり、療友・読者という立場ではなく、ひとりの写真家として同誌の活動に参加していたのではないかと。

再発後の活動 再び療養所での生活がはじまると、『保健同人』12-7に伊与田の体験記が掲載された。同号グラビアには「私はなぜ再発したか—あるカメラマンの記録」と題して再発前の写真が掲載された。また、特集

調査研究

「何が私を再発させたかー八年病んで回復二年で再発 これではワリにあわない」では伊与田本人の体験記と主治医・植村医師の見解が文章化されており、伊与田の療養生活をうかがい知ることができる貴重な記録となっている。小稿は同号の記載や掲載写真に多く依っている。

また、再発後の活動として特徴的なものは「清瀬風物誌」という伊与田の連載記事である。

清瀬風物誌(一)療養所の裏庭

清瀬風物誌(二)三角山

清瀬風物誌(三)夏の夜

清瀬風物誌(四)この道

清瀬風物誌(五)女だけの城

清瀬風物誌(六)野の鳥

清瀬風物誌(七)鐘

ここに各連載の記事タイトルを掲げた。療友で小説家の福永武彦の代表作『草の花』の一節や波郷の一句を引用して、療友たちの憩いの場である寿康館の裏庭や療養所周辺に風趣をそえる「三角山」などを紹介している。

この三角山とは、すぐ近くを流れる野火止用水を開鑿した残土で築造されたと言われており、山頂には浅間神社が鎮座する富士塚で清瀬地域の人々の信仰の場となっていた⁽¹⁸⁾。



通称「三角山」と呼ばれた「下里の富士塚」

戦後最大の台風発生 1958年9月26日に発生した台風22号は、当時の東京に戦後最大の被害をもたらし、浸水家屋は33万戸に及んだと報道されている。千代田区にあった保健同人社の事務所も浸水被害を受けており、伊与田はその様子を記録している。



台風22号で浸水した事務所



保健同人社前で水害対応する消防

療養生活写真コンテスト審査会 田辺製薬株式会社主催、保健同人社が協賛する第1回「療養生活写真コンテスト」の作品募集が1961年3月に開始され、5月15日に応募作品の審査会が行われた。審査員は、土門拳（写真家）・小安正直（アサヒカメラ編集長）・島村喜久治（国立清瀬病院長）・守屋尚二（田辺製薬学術部長）・大渡順二（保健同人社社長）の5名である。

審査当日は日本橋浜町の水光苑に審査員が参集して厳選なる審査と作品判定が行われ、その様子を伊与田が撮影していた。



審査風景（座っているのが土門拳）

お、当クラブの会員は、永い療養生活のために生計水準は低下し、職場からは解雇されて、全快して社会に復帰しても生計をたてるすべもない状態である。このクラブが他の写真団体と異なるところは、曖昧と実益をかねた共同補修であり、全快して社会に復帰した会員の大多数はDPを開業したり、写真関係の職場についている点である。

(『アサヒカメラ』37-12、1952年12月発行)

上記の通り、光陽クラブの指導役は伊与田が担っており、1952年～1954年にかけての写真雑誌で光陽クラブが紹介される際には伊与田が「代表者」「責任者」という肩書で掲載されている。推測ではあるが、伊与田は1949年末から術後の体調回復がみられることから、おおよそこの時期以降に光陽クラブが結成され、その中心に伊与田がいたとみてよいだろう。

なお、「所内の宣伝写真」「学術写真」「患者の記念撮影」などのさまざまな撮影に光陽クラブが協力していたようである。療養所の医師たちも伊与田の写真技術を信頼していたようで、宮本忍・島村喜久治監修『結核の事典』（筑摩書房、1953年）には伊与田が撮影した手術中の様子が口絵に採用されている。宮本は国立東京療養所の外科医長、島村は国立東京療養所清瀬病院長であり、伊与田コレクションには2人を撮影した写真も含まれている。



土門拳（右）と共に作品を見る伊与田（左）

『暮しと健康』へ改題 結核が激減して、それに代わって成人病が注目されるに伴い、健康をトータルに扱う誌名と内容へ一新することになった。そして、1964年5月発行の『保健同人』19-5で終刊を迎えており、改題後は伊与田の関与が見受けられなくなる。

Ⅲ. 療養中の写真活動－光陽クラブ－

国立東京療養所の文化活動 療養所では医療活動はもちろんのこと、患者同士の親交や娯楽を目的とした様々なクラブや同好会が結成され、療友同士が共に支え合いながら療養生活を送っていた。療養中の伊与田も療友たちと一緒に写真クラブを立ち上げて、その活動に勤しんでいた。これは、旧稿でも紹介しているが、改めて国立東京療養所の写真クラブ「光陽クラブ」について確認しておきたい。

光陽クラブ

国立東京療養所で療養中の写真愛好家四十名で結成、会員はA、Bの二部制をとり、A会員は軽患者であり、B会員は重患者でこれは読書会員である。毎月一回の例会を開き、作品の研究や、退所した先輩からの職場経験などを聞く。会員の指導には伊与田昌男氏が当り、中央写壇の権威者を随時招いて講習を受けている。先には福田勝治氏、長浜慶三氏が来所され静物、ポートレート、採光法などについて懇切な指導を受けた。又、所内にはクラブ専用の暗室を設けて、所内の宣伝用写真や、学術写真、患者の記念撮影にいたるまであらゆる写真の製作に協力している。会員が病人のため中央で催される展覧会などは容易に見られないので、その点は甚だ残念である。な



口絵に使用された肺切除手術

さらに、療友たちには有名な文学者たちがおり、なかでも伊与田と石田波郷の交流は有

調査研究

名であり、波郷の代表作で、療養俳句の集大成とされる句集『惜命 定稿』（琅玕洞、1955年）にも療養生活を撮影した伊与田の写真（6枚）が掲載されている。



雪の院内（『惜命 定稿』掲載写真）



初夏の作業患者達（伊与田撮影）
（石田波郷『惜命 定稿』より転載）

療友・中村勝治旧蔵アルバム 伊与田から1年遅れの1949年5月に国立東京療養所へ入所した中村勝治（中島飛行機技師）が作成した「東療の想ひ出（其の一）」「東療の想ひ出（其の二）」という表題をもつ2冊のアルバム（以下、中村アルバム）が結核予防会結核研究所図書室に所蔵されている。このアルバムは、国立病院機構東京病院の名誉院長室から発見されたもので、同院に保管されていた経緯は不明、アルバム原本はすでにご遺族へ返却されており、複製版を結核予防会結核研究所、国立病院機構東京病院、清瀬市郷土博物館が所蔵している⁽¹⁹⁾。中村アルバムの存在は結核研究所で資料調査を実施した際にご

教示いただいた。

療養所では写真を楽しむ光陽クラブの他に「俳句班（句会「松濤」）」「ロシア語講習会」「碁・将棋」「ピアノ班」「園芸班」などが存在しており、中村アルバムにはさまざまな同好会やクラブの活動が記録されていた。



病床上で将棋を指す
（中村アルバムより転載）

光陽クラブの講習会 先述の通り、光陽クラブでは有名写真家を招いての講習会を開催していた。1950（昭和25）年11月4日には、写真家・福田勝治による講習会が開催されており、その際の集合写真が中村アルバムに収録されている⁽²⁰⁾。また、同アルバムから人物写真で有名な写真家・長浜慶三を招いた講習会の記念写真も発見された。2枚の写真で名前の判明する人物を列記すると以下の通りである。

石崎海平	永久保和夫
伊与田昌男	藤村忠男
佐々木有一	亀山
中村勝治	金子秀吉
堀口要	丸山進
持田雅威	



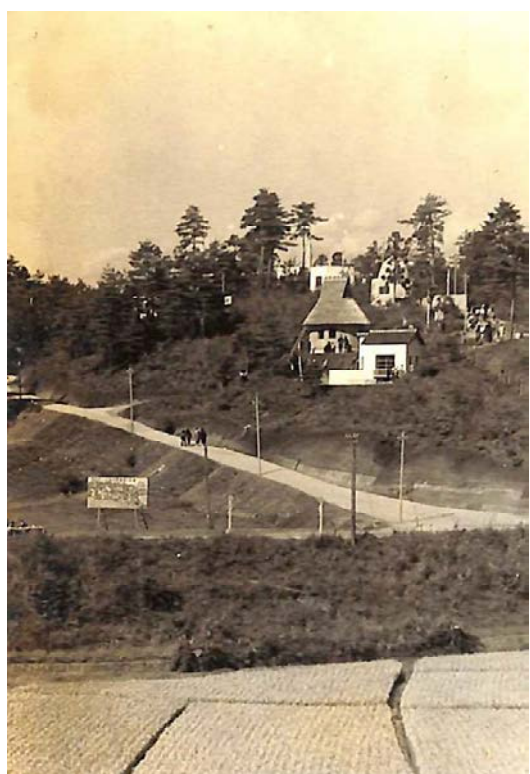
長浜慶三先生を招いて人物撮影の指導をうける
（中村アルバムより転載）

この人々が光陽クラブのメンバーの一員であったことはほぼ間違いないのではないか。彼らの経歴や活動を調査することで、今後伊与田に関する新たな手がかりが見つかる可能性もあるだろう。

光陽クラブの課外活動 中村アルバムには、1951年11月3日に山口貯水池・ユネスコ村で撮影会を行った様子が記録されている。当日の参加者は、中村、伊与田、石崎海平、堀口要の4名であり、当時のユネスコ村ではイベントととして撮影会が行われていたようで、光陽会のメンバーはこれに参加していた。



撮影会 ユネスコ村（モデルカ）



撮影会 ユネスコ村
（中村アルバムより転載）



撮影会 ユネスコ村遠景

また、1953年8月発行の写真雑誌には光陽クラブのメンバーによって撮影された自由作品が掲載されている。



撮影会 ユネスコ村 記念写真
左から伊与田・石崎・堀口・中村
（中村アルバムより転載）

東京都心から遠く離れた武蔵野の一角に清瀬村があります。この村には東京療養所を始めとして、清瀬病院、結核研究所その他数個のサナトリウムが並んでいて、どの病院を訪ねてみても写真を楽しんでいる患者が沢山いて、熱心な人達は各々クラブを作って、一般のアマチュアクラブ並に写真研究をやっています。患者同志の記念撮影などは所謂写真屋さんの手を借りるまでもなく、クラブ員の手でかわるがわる撮影され、特別に設けられた暗室で現像、密着焼、引伸等何等不自由なく行はれるということです。記者は35ミリカメラ・コニレットの試作品を借り受けて、東京療養所を

調査研究

訪れ光陽クラブの方々に会い、この一個のカメラでクラブ員に代る代る写して頂く約束をしました。しかも撮影期間は僅かに5日間位でありました。その結果がどんなものであったかは、この作品集をごらんになればお分りのことでせう。療養のかたわらにもこうした明るい楽しい面のあることを味わって頂きます。

(『ミニフォト』1-1、1953年8月発行)

ここには、光陽クラブのメンバーである三善博之、田中章雄、伊与田昌男、武江昭三の写真が掲載されている。この写真は、小西六写真工業から新発売の35ミリカメラ「コニレット」を編集部から光陽クラブに貸与して撮影されたものである。一般大衆向けに開発された小型カメラの広告・宣伝を兼ねた企画ではあるが、光陽クラブが単なるアマチュアのサークル活動ではなく、技術的に優れていたことが評価されての依頼だったようである。



新緑の療養所（伊与田撮影）
(『ミニフォト』1-1より転載)

その後、1954年になると光陽クラブの会員数は80名に達して、会員が大幅に増加したとみられる。伊与田は同年10月に療養所を退所しており、それ以降は光陽クラブの活動からも離れていき、再発後は活動に参加していなかったと推測している⁽²¹⁾。

おわりに

写真家・伊与田昌男にとって結核発症と療養生活が、その生涯と写真活動に多大なる影響を及ぼしたことは想像に難くない。そこで、小稿では、伊与田の戦地からの復帰と結核発症、社会復帰と再発、療養生活中の写真活動について、写真作品と写真雑誌を中心に検証した。

その結果、戦地から帰還した伊与田が朝日新聞社に復帰していたこと、復員後は公私の別は不明ながら報道写真家として、戦時下の空襲記録や戦後復興に向けた市街地や人々の動向を撮影していた。その後、結核の発症、成形手術を経て、一時的に写真活動を休止するが、体調回復を目的とした療養生活のなかでも写真活動は継続されていた。ひとつは、療養雑誌『保健同人』を通じて、カメラ・写真を愛する全国各地の療友と「保健同人カメラクラブ」でつながっていた。また、国立東京療養所の文化サークルのひとつ「光陽クラブ」では、療養所内のカメラ愛好家と集い、日常的に写真技術を磨いていた。伊与田は両団体で指導的な立場を担っており、結核患者のなかで写真家としての実力が一線を画していたのだろう。

再発後の伊与田がいつまで療養生活を続けていたのか、管見によれば記録が見当たらないが、恐らく退所後にあたる1969年から伊与田は『看護技術』という医療系雑誌のグラビアを担当して、各地の病院や医療施設、老人ホームなどを取材している。このように、50代半ばで医療福祉ジャーナリズムの道に進んでいくのも、自らが経験した「療養生活」が基礎になっていたのではないかと推測される。

残された課題は山積しているが、今後も調査と検討を続けながら、「伊与田昌男コレクション」の歴史的な価値を発信していきたい。

【註】

- (1) 拙稿「多摩地域ゆかりの写真家・伊与田昌男ーたましん地域文化財団所蔵「伊与田昌男コレクション」調査報告Ⅰー」
（『歴史資料室年報』創刊号、2023年）、久生十蘭「従軍日記」（『定本 久生十蘭全集 10』国書刊行会、2011年）。
- (2) 朝日新聞社社史編修センター所蔵資料による。
- (3) 目黒区史研究会『目黒区50年史』（目黒区、1985年）。
- (4) 拙稿「〈館園からの最新情報〉伊与田昌男コレクションの紹介（歴史資料室）」（『東京都博物館協議会会報』No.130、2024年）。
- (5) 酒井美和『国立結核療養所ーその誕生から一九七〇年代までー』（生活書院、2023年）。
- (6) 朝日新聞社社史編修センター所蔵資料による。
- (7) 朝日新聞社社史編修センター所蔵資料による。
- (8) 『保健同人』9-13（1954年3月発行）に「伊与田昌男（元朝日新聞写真部、現食生活編集部）」とある。
- (9) 『保健同人』12-7（1957年7月発行）。
- (10) 『保健同人』12-7（1957年7月発行）。
- (11) 『全写真材料業界名簿 昭和33年度版』（日本写真興業通信社、1958年）。
- (12) 『保健同人』12-7（1957年7月発行）。
- (13) 『保健同人』12-7（1957年7月発行）。
- (14) 『保健同人』12-7（1957年7月発行）。
- (15) 『保健同人』12-7（1957年7月発行）。
- (16) 『保健同人』7-6（1952年6月発行）。
- (17) 『大渡順二文集Ⅰ 病めるも屈せず』（保健同人社、1981年）。
- (18) 『清瀬の富士講ー清瀬から富士を目指した人々ー』（清瀬市郷土博物館、2018年）。
- (19) 工藤翔二「昭和20年代の療養生活ー中村勝治氏のアルバム」（『複十字』No.407、2022年）。
- (20) 前掲（註1）の拙稿にて紹介している。
- (21) 『日本写真年報 1958年版』（日本写真協会、1958年）では「多古孔彦」が代表者となっている。

資料紹介

写真でみる保谷町の空襲

—たましん地域文化財団所蔵「伊与田昌男コレクション」調査報告Ⅲ—

山田 兼一郎（歴史資料室）

たましん地域文化財団歴史資料室で保管している「伊与田昌男コレクション」（以下、伊与田コレクション）は、八王子出身の写真家・伊与田昌男の作品群であり、約 28,000 点にも及ぶ膨大な写真コレクションである。ここでは、同コレクションに含まれているアジア・太平洋戦争中の保谷町における空襲被害を記録した可能性のある未公開の写真を紹介したい。

伊与田昌男が記録した保谷町の空襲

当時の伊与田は、報道班員として参加した南方従軍から復員し、朝日新聞社に復帰していた時期と考えられる。小稿に掲載した 7 点の写真は、伊与田が記したメモによれば保谷町の空襲記録の可能性があり、これが証明されれば多摩地域の貴重な戦災記録であるといえよう。

まず、驚くべきは爆弾が爆発した一瞬、爆風で土砂が高く舞い上がる瞬間を見事にとらえた 1 枚である。この写真には「1 トン爆弾爆発の一瞬」というキャプションが付されている。この写真①が爆弾投下の瞬間をとらえたものなのか、不発弾処理の瞬間なのか、判断するための材料を欠いている。とはいえ、不発弾処理の瞬間を撮影したものと考えるのが現実的であろうか。伊与田のメモにある「20.3」を文字通り「昭和 20 年 3 月」と解釈すれば、これは終戦 5 ヶ月前の保谷町で撮影された写真の可能性はある。

写真②は、不発弾の穴を地上から眺めている軍人 2 名が写っている。屈んでいる軍人は爆弾坑に差し出すように軍刀を横向き持っており、まるで刀をスケールの代わりにして爆弾坑と比較して大きさを示しているようである。



写真① 20.3 トン爆弾 爆発の一瞬

つぎの写真③は、爆弾坑の内部に潜っていく軍人を地上から撮影したものである。穴の底部には不発弾と思われる爆弾が無造作に転がっているが、そのすぐ近くまで寄っていく軍人は特段の装備もなく通常の軍服を身にまとっているだけのようである。

メモ書きが一部しか確認できない写真④には、着弾の衝撃や爆風の影響が原因なのか定かではないが、写真中央に傾いた鳥居が写っている。写真⑤は、キャプションによれば爆風と土砂で壊れた民家の様子であり、半壊している民家の前で軍人 2 名が検分しているように見える。なお、この破壊された民家の内部をアップしたのが写真⑦であろう。写真⑥は、写真②と同じように軍人が爆弾坑の大きさを比較するものとして軍刀を用いる様子を撮影している。



写真② 20.3 一トン爆弾 不発弾の穴（保谷村）



写真③ 20.3 不発一トン爆弾（保谷村にて）



写真④ …落ちた…の穴



写真⑤ 20.3 1トン爆弾の爆風と土砂で破壊された民家



写真⑥ 20.3 ートン爆弾の穴



写真⑦ 同左 (20.3 ートン爆弾の穴)

これらの写真は寄贈時に「No. 1 戦時写真」という一群になっており連番で保管されていたネガフィルムである。なお、筆者が見るかぎり、写っている景観や風景などから撮影場所の特定はできなかった。つまり、伊与田のものと思われるメモ書きに「保谷村」と記されていること以外は⁽¹⁾、この7枚の写真が保谷町の空襲被害の記録だということを確定する証拠は乏しいといった状況である。

保谷町における空襲被害の記録

1942年4月18日、米軍機が東京・名古屋・神戸などに向けて爆撃したのが、太平洋戦争における最初の空襲被害である。そして、首都・東京への本格的な空襲は1944年11月24日にはじまり、当初は飛行機工場などの軍需施設や産業都市を標的とした狙った戦略爆撃であった。

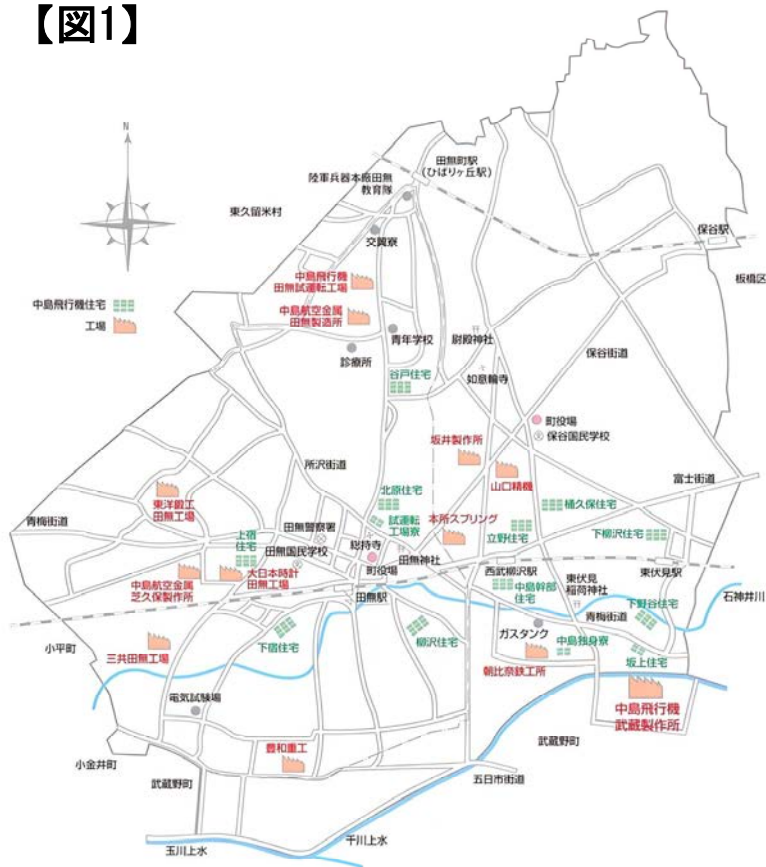
そして、保谷町が空襲で受けた爆撃被害は【表1】の通りであり、その回

数は11回に及んでいる。爆撃被害の回数が多い地域は「中島飛行機をはじめ大きな軍需工場の多かった田無、武蔵野、保谷、三鷹、東久留米などであり、立川飛行場、立川飛行機工場のあった立川（砂川）、昭島」であったと指摘されており、保谷町は多摩地域のなかでも田無（16回）、武蔵野（14回）、立川（13回）に次いで4番目に多い爆撃を受けていたのである⁽²⁾。『保谷市史』は、「中島飛行機の航空機エンジン気化機を製作していた朝日奈鉄工所が狙われ、同鉄工所を中心に被害が生じた」と指摘している。

【表1】保谷町域の爆撃回数

① 1944年11月24日	全焼6・半焼1・全潰12・中潰10・小潰7・小破3/死亡16・負傷12/爆弾44・焼夷弾19
② 同年12月3日	全焼5・全潰13・半潰17・小潰2・中破12・小破19/死亡13・負傷6/爆弾61・焼夷弾19
③ 同年12月27日	全焼1・全潰5・半潰1・小潰1・大破2・中破2・小破6/死亡8・負傷4/爆弾46・焼夷弾16
④ 1945年1月9日	全潰2・半潰6・小潰1・小破2/死亡1・負傷3/爆弾8
⑤ 同年2月17日	全焼3・全潰2・半潰1・中破4・小破2/死亡2/爆弾8・焼夷弾3
⑥ 同年3月4日	全焼3・半焼2/負傷1/爆弾8・小型焼夷弾1000
⑦ 同年4月2日	全潰20・半潰17・小潰2・大破6・中破2/死亡46・負傷6/爆弾301
⑧ 同年4月7日	全潰36・半潰61・大破3・中破2/死亡16/1000%爆弾15
⑨ 同年4月12日	全焼2・全潰108・半潰92・小潰56・大破56・中破27/死亡15・不明1・負傷2/1000%爆弾56・焼夷弾19
⑩ 同年7月29日	全焼1・全潰8・半潰13・大破1・中破33・小破1/死亡3・負傷8・軽傷3/ロケット弾
⑪ 同年8月8日	全潰5・住居不能多数/死亡7/爆弾大小50

【図1】



参考として、西東京市域（旧田無町・保谷町）に開設された軍需工場がプロットされた【図1】を同市ホームページ「西東京市戦災パネル」から転載した⁽³⁾。なお、保谷空襲に関しては、貴重な記録と証言が残されており、これをまとめた『保谷の被爆記』（1972年）が刊行されている。同書を編集した本橋徹氏は、保谷の爆撃には武蔵野町（現・武蔵野市）に所在した中島飛行機武蔵製作所と保谷町が隣接する位置にあることが関係しており、「吾が保谷町の地続きであるところから、そのソレ弾が落ち保谷住民が思わぬ被害を受けたのである。爆弾はどういうわけか製作所のある武蔵野町より保谷町地区へ多く落ちた。」と述べている。

1945年4月2日に保谷町を7回目の爆撃が襲った。これは保谷町史上最大の人的被害が発生した爆撃であり、301発もの爆弾を投下されて死傷者は50名を超えたという。この日の空襲は、保谷町だけでなく北多摩東部に甚大な被害をもたらしたようで、昼間ではなく夜間空襲であったという点などに注目して牛田守彦氏が詳細な分析を行っている⁽⁴⁾。そして、牛田氏は、この爆撃が「照明弾」と「時

限爆弾」を使用したことが特徴で、前後数回の空襲作戦は「夜間精密爆撃と呼ばれる実験的な要素の強い作戦として実施」され、当初の目標は「航空機工場に対する精密爆撃だったが、結果として無差別爆撃となった」と指摘している。

ところで、先述した『保谷の被爆記』には、保谷町警防団長・金子金次郎の「金子警防団長の日記」と「金子新五郎の日記」、「東伏見稻荷神社日記」という3つの日記が収録されている。

本橋氏は同書で「落ちた爆弾は一屯ともいわれ、五百キロとも、或いは二十五キロともいわれたが、それは、落ちて爆発した穴の深さや大きさによって、

いろいろ取り沙汰されたもののように」と語っているが、写真②・⑥はまさに爆弾坑の大きさを見聞する様子に見て取れ、伊与田のメモ書きによればこのとき投下された爆弾は「1トン爆弾」のようである。

2005（平成17）年7月、旧保谷町域にあたる東伏見3丁目の畑で「1トン爆弾」の不発弾が発見され、陸上自衛隊による処理作業で地中から取り除かれた⁽⁵⁾。この爆弾と写真③に写っている不発弾は酷似しているように思われる。いずれも尾翼部分は外れているが、爆底部には同様のラインが付いており、今後の調査の参考になり得る。



東伏見3丁目で発見された不発弾

調査研究

さらに、憶測をたくましくして、伊与田のメモ書き「20.3」が撮影日と考えた場合、1945年3月中の爆撃被害の状況が重要になるだろう。そこで、「金子警防団長の日誌」「金子新五郎日誌」より同月中の警戒・空襲警報や爆撃の状況を【表2・3】としてまとめて末尾に掲載した。空襲警報は、3月4日と9日、11日に発令されているが、実際に爆撃被害を受けたのは3月4日のみである。

もしも、伊与田が撮影した7枚の写真が1945年3月の保谷町への爆撃を記録したものであるならば、「金子新五郎日誌」の記載が参考になるのかもしれない。

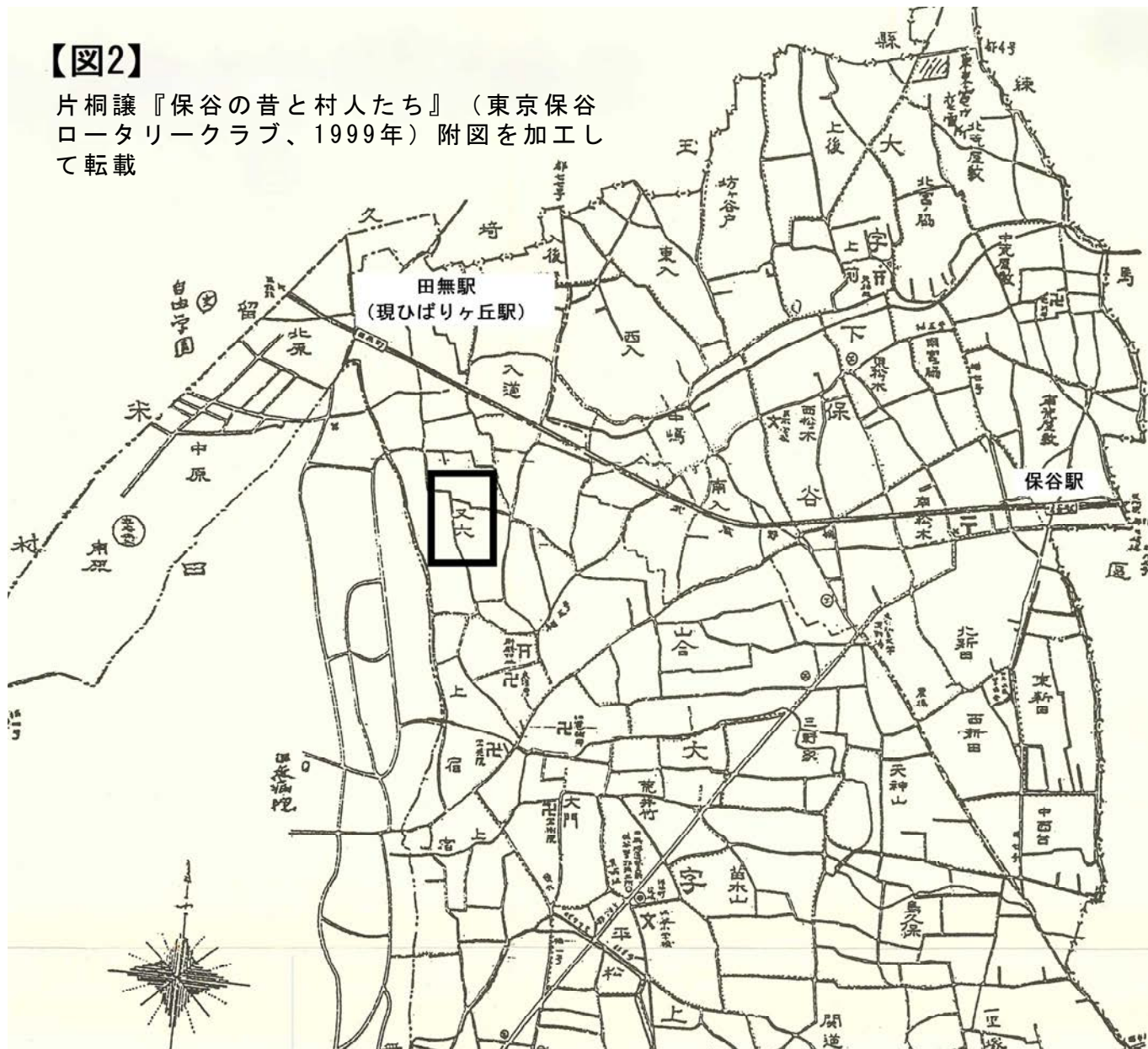
北又六天神へ爆弾一焼夷弾数一〇〇発 火災三戸

上記は、同日誌3月4日の記載であり、写真④に写る「鳥居」との関係性が気になるところである。この「北又六天神」がどの神社・小祠にあたるのか判然としないが、保谷町上保谷に「又六」という小字がある【図2】。現在の住吉町には「又六」というコミュニティバス停留所、西東京市の指定文化財「又六石仏群」が現存している。「北又六天神」というのが、西東京市住吉町2・3丁目とひばりヶ丘北3丁目にまたがる小字「又六」と関係するならば、この地区の北側に存在した小祠（天神社）だったのであろうか。

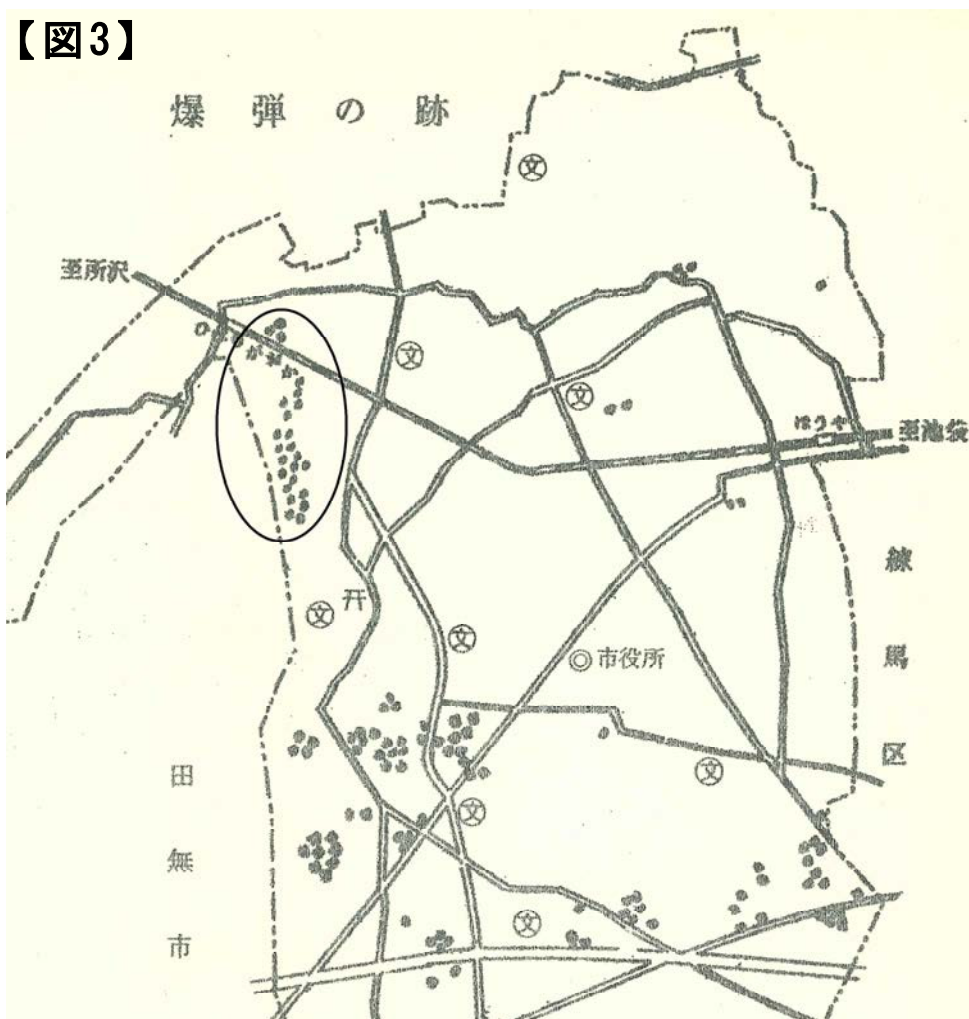
そして、「金子新五郎日誌」の記載の通り、「北又六天神」が3月4日に爆撃を受けたのであれば、伊与田が撮影した爆撃被害を受けた「鳥居」との関係性の解明を進めることが求められる。

【図2】

片桐讓『保谷の昔と村人たち』（東京保谷ロータリークラブ、1999年）附図を加工して転載



この又六地区の周辺は『保谷の被爆記』掲載の地図「爆弾の跡」でも多くの爆撃があったことが図示されており【図3】、写真④の撮影日や撮影場所の検証に際して、今後何らかの手がかりを得られる可能性が秘められているのではないかと推測される。ちなみに、同書の口絵には「又六の爆弾投下穴跡—上保谷又六二、六四四（保谷藤吉氏所有山林）」というキャプションの写真（右掲）がある。



「東伏見稲荷神社日誌」は同日について以下のように記録している。

一、午後七時過警報発令サレ間モナク解除サレタリ

三月四日 日曜日 曇午後雪

一、午前七時半警戒警報発令八時空襲警報全十時空襲ヲ十時十分警戒警報解除サル

この記録では、3月4日にどこの地域で、どのような被害があったのか詳しい状況までは確認できない。なお、神社日誌の1945年5月18日の記録をみると、「本日も町内爆弾の穴埋の為社掌出勤せられたり」とあり、地域住民が協力して爆弾坑を埋め戻していたようである。当時は爆弾坑が意外にも身近なものだったのであろうか。これは、軍関係者では

大本営発表サレタル処ニテハ敵B二九約百五十機四梯団ノ編隊ニテ静岡ヨリ山梨ヲ経テ帝都上空ニ侵入シ帝都西北方及帝都ヲ雲上ヨリ盲爆（爆弾及焼夷弾混合）セリ

調査研究

ない伊与田が間近で爆弾坑を撮影できたこととも関係するのかもしれない。ただし、伊与田の写真には、爆弾坑だけではなく、不発弾も写っていることに留意しなければならないだろう。

ここまで、見てきたように、伊与田が撮影した空襲被害の記録写真は、伊与田本人のメモ書きしか手がかりがなく、その内容は未確認の部分が多い。それでも、写真を公開することで、新たな情報や知見を得られればと考えて小稿を起こした。

戦後 80 年目を迎えて、戦争体験の語り部たちの多くが鬼籍入るなかで、筆者を含めて「戦争を知らない世代」が過去の戦争と向き合い、後世へと語り継ぐ役割を担っていく必要がある。戦争を正しく伝えていくためには、当時の証言や文書・記録などをしっかりと保存・継承していくことが重要であろう。

【表 2】

昭和20年3月中の各警報

日付	時間	各警報			備考
		警戒	空襲	解除	
3月4日	7時30分	○			北又六天神へ爆弾1、焼夷弾数100発、火災3戸 B 29・150機
	8時30分		○		
	10時30分			○	
3月5日	0時20分	○			
	1時20分			○	
	1時40分	○			
	2時00分			○	
	19時20分	○			
3月6日	10時50分	○			
	12時30分			○	
	23時50分	○			
	1時10分			○	
3月7日	12時00分	○			
	13時20分			○	
3月8日	10時00分	○			
	11時00分			○	
3月9日	23時35分	○			初夜間爆撃東京下町大火災被害 B 29
	11時50分		○		
	3時00分			○	
3月10日	10時35分	○			
	11時20分			○	
3月11日	3時50分	○			
	4時15分			○	
	10時00分	○			
	10時50分			○	
	13時00分	○			
	13時10分		○		
	14時15分			○	

写真家・伊与田昌男が残した膨大な写真群のなかから、戦時下・戦後の地域社会の動向を伝えてくれる写真を抽出して、各地域の戦争体験や証言記録、戦災資料との照合を進め、地域の戦争・空襲記録として活用できる写真となるよう、今後も調査を続けていきたい。

日付	時間	各警報			備考
		警戒	空襲	解除	
3月12日	8時50分	○			
	9時25分			○	
3月15日	7時30分	○			
	14時20分			○	
3月17日	1時30分	○			
	3時00分			○	
	13時35分	○			硫黄島玉砕
	14時10分			○	
3月18日	12時10分	○			
	14時30分			○	
3月20日	9時00分	○			
	9時30分			○	
	12時30分	○			
3月21日	13時00分			○	
	13時30分	○			
3月24日	14時00分			○	
	8時50分	○			
	9時40分			○	
	21時40分	○			
3月28日	22時50分			○	
	12時30分	○			
3月29日	13時00分			○	
	12時40分	○			
3月30日	13時20分			○	
	9時00分	○			
3月31日	9時30分			○	
	12時30分	○			
	12時42分			○	

出典：「金子新五郎 日誌」（『保谷の被爆記』郷土誌「保谷」発行会、1972）より作成

【表3】

昭和20年3月中の警戒警報および空襲警報

日付	時間	警戒警報	空襲警報
3月4日	7時27分	発令	
	8時33分		発令
	10時01分	解除	
	10時08分		解除
3月5日	0時11分	発令	
	2時06分		解除
	2時25分	発令	
	2時56分		解除
	18時38分	発令	
	19時25分		解除
3月6日	11時53分	発令	
	12時35分		解除
	23時30分	発令	
	0時56分		解除
3月7日	12時20分	発令	
	13時02分		解除
3月8日	9時45分	発令	
	10時35分		解除
3月9日	22時31分	発令	
	0時15分		発令
	2時37分		解除
	3時20分		解除
3月10日	10時18分	発令	
	10時50分		解除
3月11日	10時20分	発令	
	10時45分		解除
	12時50分	発令	
	0時11分		発令
	1時51分		解除
	2時20分		解除
3月12日	21時00分	発令	
	21時25分		解除

日付	時間	警戒警報	空襲警報
3月15日	7時23分	発令	
	14時20分		解除
3月17日	1時37分	発令	
	3時20分		解除
	13時28分	発令	
3月18日	13時50分		解除
	11時55分	発令	
3月18日	13時05分		解除
	9時10分	発令	
3月20日	9時30分		解除
	12時36分	発令	
	12時50分		解除
3月21日	13時35分	発令	
	14時10分		解除
3月24日	8時50分	発令	
	10時10分		解除
	22時00分	発令	
3月24日	22時55分		解除
	13時00分	発令	
3月26日	13時25分		解除
	12時20分	発令	
3月28日	12時45分		解除
	12時27分	発令	
3月29日	12時50分		解除
	8時27分	発令	
3月30日	9時20分		解除
	11時40分	発令	
	12時05分		解除
	12時17分	発令	
3月31日	12時40分		解除

出典：「金子警防団長の日誌」（『保谷の被爆記』郷土誌「保谷」発行会、1972）より作成

【註】

- (1) 伊与田のメモには「保谷村」とあるが、1940年11月に町制を施行して「保谷町」となっており、撮影当時（1945年）は「保谷町」が正しいと考えられる。
- (2) 竹野功騎「多摩の空襲と戦災」（『多摩のあゆみ』第35号、1984年）。
- (3) https://www.city.nishitokyo.lg.jp/enjoy/heiwa/sensai_paneru/sensaipaneru.files/a02.pdf
- (4) 牛田守彦「昭和二〇年四月二日の夜間空襲—北多摩東部を襲った「時限爆弾」の真相」（『多摩のあゆみ』第141号、2011年）、あわせて同氏「戦争体験を視覚化し検証する—西東京市域における空襲体験記録と米軍資料を中心に—」（『多摩のあゆみ』第119号、2005年）も参照した。
- (5) https://www.city.nishitokyo.lg.jp/enjoy/heiwa/sensai_paneru/sensaipaneru.files/a24.pdf

編集後記

2024年元旦に発生した能登半島地震の犠牲となられた方々にお悔やみ申し上げるとともに、被災者ならびにそのご家族の皆さまには心よりお見舞い申し上げます。

我々にとって深刻な被災状況を伝えるニュースは、正月気分を一気に吹き飛ばし、大地震の恐怖が現実味を帯びた瞬間だったのではないだろうか。関東大震災の発生から100年という節目にあっていた2023年は、各メディアが災害の歴史や防災・減災について取り上げており、国民の防災意識向上の気運があったはずだった。かくいう私自身も『多摩のあゆみ』の地震特集号を担当して、防災意識が高まったと自負していたが、それが単なる慢心であったことを思い知らされた。

歴史資料室は2011年の東日本大震災で被災しており、地上5階にある閲覧室の書棚から220冊ほどの書籍が落下した。震災当日は、帰宅難民となり深夜まで事務室に居残ることになった職員もいた。幸い怪我等の人的なトラブル、所蔵資料の破損等は見られなかったが、多摩各地の重要な地域資料を収蔵する地域アーカイブズとして、当室は大規模災害にどのように備えるのか、しっかりと議論する必要があるだろう。そして、歴史研究を志す者として、今こそ過去の災害に学び、すぐそこに迫っている首都直下地震に備えなければならない。

歴史資料室年報 2023 第2号

2024（令和6）年8月31日発行

編集・発行

公益財団法人たましん地域文化財団
歴史資料室

〒186-8686
東京都国立市中1-9-52

TEL 042-574-1360

FAX 042-526-7788

E-mail rekishi@tamashin.or.jp

**The annual bulletin of
HISTORICAL MATERIALS ROOM**

2023

Tamashin Culture Foundation